

聖徒の道

一九五八年三月十七日第三種郵便
認可(毎月一回)一日発行
第六卷第十二号 一九六二年七月
一日発行

SEITO-NO-MICHI



クリスマス特集号

末日聖徒イエス・キリスト教会

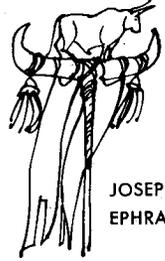
12

1962

The Seito no Michi

Volume 6, December 1962, Number 12

In this Issue



JOSEPH
EPHRAIM

A Prophet's Voice: At this season	President David O. MaKay...765
President's Message	President Dwayne N. Andersen...769
Joseph Smith An Appreciation	B. H. Roberts...772
The real Story of Christmas	W • Cleon Skousen775
A Bible Seminar (at Tokyo Central Branch) (3)	786
As one of the Labor Missionaries	Nara Fujiya...691
A bit of Salt (2)	792
A Music Corner (2)	793
Church Articles	794
Genealogy Guide	
Hymns for Exercise	
Sunday School Guide for J. S. S. (for January)	
Sunday School Guide (for January)	
MLA Leader (for January)	
Aaronic Priesthood: Branch Teaching Lesson (for December)	807
Mission Headquarter News	808
Mission Mother's Message	809
Relief Society Lessons	815
Literature - Theology - Visiting Teacher Message - Work Meeting	
GOSPEL IN ENGLISH (for studying Gospel in English)	829

聖徒の道

第 6 卷
第 12 号

12 月号



神の
味方をせよ
かならず
神は
守りたもう

写真ニュース

東中央地方部大会（東京）

11月3日MI A大会が豊島公会堂で開かれた。中央支部、南支部合同の演劇は、雨にもかかわらず集って来た会員に大きな感めいを与えた。その他各支部のコーラス、西支部の演劇があり盛会のうちに終わった。

4日の一般大会は虎ノ門の日消ホールで開かれた。会場いっぱい集まった会員たちを前に話をされる伝道部長、左は第一副伝道部長吉野長老。



一般大会で合唱をひろうする東京LDSコーラス、指揮者山岸清子姉妹。



フェイヤサイドで宣教師全員の力強いコーラスなどあり。非常に盛大であった大会を終った。(中央支部上村姉妹撮影)



京浜地区バスケットトーナメントはじまる

最近、京浜地区の宣教師が主体となって、会員、求道者の相互理解を深めるためにバスケット試合が計画された。写真はその第一試合で中央支部と横浜支部の対戦、中央ボールを持つのは伝道部長。

金沢支部ハロウィンパーティー

10月31日のハロウィンナイトにMIAのパーティーを開くことができたとは本当にラッキーでした。更にこの日の出席者の半数がMIAはじめてのお友だちだったことは素晴らしい収穫だったと思います。



三の宮支部の新しい支部長会

向って右から、楠見(第二副支部長)神尾(第一副支部長)山邑(支部長)山川(書記)兄弟



系図の道しるべ(二月用)……………794

子供日曜学校ガイド(二月用)……………776

練習の讚美歌(二月用)……………798

日曜学校ガイド(二月用)……………799

M I A リーダー(二月用)……………802

アロン神権プランチ・ティーチング・レッスン(十二月用)……………807

伝道部長夫人メッセージ……………ペギー・ヒュイシ・アンダーセン……………809

母親にルシイ・マック・スミスの語る

ジョセフ・スミスの生涯(四)……………扶助協会文学用レッスン……………811

扶助協会レッスン……………815

神学・社会科学・訪問教師のメッセージ・仕事会

英会話テキスト……………英語の福音……………829

ちよつとひといき△寒蛙・音楽の窓▽……………792



目次 聖徒の道 一九六二年十二月号

予言者のことば

クリスマスを迎えて

大管長 デビド・O・マッケイ…765

伝道部長メッセージ

ダワエン・N・アンダーセン…769

ジョセフ・スミスに感謝をささげる

ビー・H・ロバーツ長老…772

ほんとうのクリスマスの話

W・クレオン・スカウセン…775

ある聖研より
(聖書研究会)

786

勤労奉仕宣教師に召されて……………奈良富士哉…691





予言者のことば

クリスマスを迎えて

大管長 デビド・O・マッケイ



ベツレヘムで生まれたもうた神の御子の誕生を記念する日があることは、なんという光榮であろう。そのころローマ皇帝の勅令が出たので、税金をおさめるためにジョセフとマリヤはつれだつてベツレヘムへ行かなければならなかつた。

ふたりがナザレから旅をしてベツレヘムへついたときには、あらゆる宿屋がいっぱいであつたので、隊商がとまる場所へ行かなければならなかつた。これはふつう画になつていゝるような馬小屋ではなく石灰岩をくりぬいたほら穴で、そこにはいろいろな動物が入れてあつた。このような最も粗末な環境の中で人類の救い主である神の御子はお生まれになつた。

イエスは生まれてすぐかいばおけの中におかれたもうたが、われらの創り主である父なる神の御子としてすべての権能をお受けになつた。イエスは人間として三十何年この世に在り、そのうちひろく世の人々に導きとめぐみを施こしたもうたのは約三年だけである。それであるのに、あらゆる人間はイエスをさして人類の中の最大の偉人、最も完全なお方であると言つてゐる。イエスは世の人々が偉大であると考えるようなことを何一つなさら

なかつた。イエスは大発見家ではなかつた。イエスは法律家を専門にしてきた人たちを負かしたもうた。イエスは著作家ではなかつた。イエスは高慢でおうへいなパリサイ人が、イエスの前になげ出した一人のあわれな女を助けるために、砂の上に何かをお書きになったほか一行もお書きにならなかつた。人間たちが名譽の冠を得る世界でイエスは偉大であつたと言えるであらうか。イエスはただ一つの世界、人格の世界でだけ最高でありたもうた。

イエスの一生を通じてそのくちびるにのぼり、そのころにあつたのは平安の二字であつた。されば、イエスが墓から出て弟子たちの前に姿をあらわしたもうたとき、最初に仰せになつたのは「平安汝らにあれ」という挨拶のことばであつた。

救い主が教えたもうた平安とは、個人がそのなやみから、家族が口論から、国家が争いからのがれることである。このような平安は、国家社会に関係があると同じように個人にも関係がある。キリストのささやきたもう声と、自身の良心のしげきに従わない人は平安がない。この人は自己のうちにある「良き我」に従わないときに平安があるはずがない。また肉欲のおもむくまに行い、誘惑に負けようと、信賴にそむいて律法を破ろうと、いずれにしても義しい律法にそむくときに平安があるはずがない。

律法を破る人に平安はこない。律法を守る人には平安がある。されば、イエスがわれわれをして人々にしっかり認めさせようと望みたもうは次のようなことばである。

一人一人に平安のあること。一人一人が彼の神とやわらぐためである。

彼の創造主と彼との間に完全な調和があること。律法には彼が従う義務があり、けつしてのがれることができない。

家庭に平和があること。たがいに、また隣人と仲よくくらす家族には平和がある。クリスマスはキリストを思い起すときである。それはわれわれの信仰を固める日であり、ベツレヘムの嬰兒の父にまします神へ近づく日である。

キリストは、われわれの生きたために死にたもうた。キリストは、われわれが罪と死の束縛からのがれる日に逢うために死にたもうた。キリストは、かつて十字架の上で「父

よ、かれらをゆるしたまえ。その為すところを知らざればなり」(ルカ伝二十三〇三十四)と祈りたもうたそのお方の前へ行く道をわれわれにはっきりと示したもうた。

まことにイエスは平和の君であるが、イエスは不思議な方法でこの世に平和を来させたもうのではない。つねに為したもうたごとく、すべての祝福とおなじく、平和のもとづく律法によってのみ平和をさずけたもうたごとく、すべての祝福とおなじく、平和のもとづくをうむ。親切はさらに親切を招き、親切と愛とによって平和がうまれる。

人類がこの簡単な教訓をおぼえるとき、当然の結果として平和がおとずれるにちがいない。うばい取ることの興味は消えうせ、人類はことごとく、お互いが神の姿かたちの通りに創られた兄弟姉妹であることがわかるにちがいない。

人類は、神を愛するためにはまず隣り人を自分自身のように愛さなくてはならぬことがわかるにちがいない。

われわれ、キリストの教会の会員は、キリストの兄弟姉妹であって、キリストがあらゆる人間のうちの最大の偉人であると信じているが、いつもそれ以上に、キリストが人類の贖い主であると信じている。アダムによって万人は「死なねばならぬ身」となった。アダムは自らえらんでこの「死なねばならぬ身」をもつ者となったのである。それは「墮落」ではない、進歩の道程の中にある一つの段階であった。アダムは神与の賜である選択の自由を使ったけれども、後の日にイエス・キリストが降臨して、アダムの子孫がことごとく神のみもとへ帰ることのできる一つの計画を確立なされることをはっきり知っていた。この計画こそイエス・キリストの福音である。

私はイエス・キリストが今生きたもうことをあかしする。また、イエスが神の性質を帯びて居たもうたと言ったペテロは真実を語ったということ、および現在生きている人々も同じように神の性質を帯びることができるということをあかしする。それは真実である。

世の人々がこぞってイエス・キリストを世の救い主と信ずるためにわれわれの力をささげることができるよう、来るべき休みの日の間われわれを神がたすけたまわんことを。

あなたがたがみなそれぞれ楽しいクリスマスと幸運な新年を迎えるように私は祈りをささげる。

伝道部長メッセージ



伝道部長
ダワエン・N・アンダーセン

ここ数年間、原子兵器と核弾頭をどこにもうちこめるミサイルとが、アメリカ合衆国もソ連も所有するようになって以来、世界は完全に破滅するせとぎわに立っています。人間は世界の平和を熱望しているにもかかわらず、平和が得られるただ一つの真の源に対して背を向けている状態であります。平和の光はいまをさること約二千年前、天の御使たちがキリストのお生れになったよるこびのおとずれを告げたときにかがやき初めました。

「神はそのひとり子をたまわったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の生命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によってこの世が救われるためである」(ヨハネ伝三〇一六―一七)。

末日聖徒にとつてキリスト降誕祭のほんとうの意義はキリスト御自身だけにあります。キリストは神の御子、この世の救い主、神会の中の御一方であります。カルバリの丘の上で「神と人との和らぎ」と「罪のあがない」という偉大なみわざをなしとげるため苦しみを お受けになった方こそキリストであります。私たちは、キリストがいまも生きて人類のところに平和を与えたもうことを知って感激をおぼえます。私たちは近代の予言者ジョセフ・スミスのうるわしい証詞によって、私たちの信仰をもう一度固めなくてはなりません。

「さて、この子羊につきてなされたるさまさまの証のあげく、われらのなす最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』ことこれなり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。すなわちもろ

もろの世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼によりて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちもみな神より生れたる息子と娘なることを証したもう」（教義と聖約七十六〇二十二—二十四）。

昔のこと、救い主はガリラヤの湖畔を歩いていて「わたしについてきなさい」と仰せになりました。すると二人の漁師はすべてをすてて救い主に従いました。また救い主が当時の有力者であったみつぎとりに「わたしについてきなさい」と仰せになると、彼はすべてをすてて救い主に従いました。この単純な献身こそ主のみわざの中にある特徴であります。

今の時代においてもこれとおなじ献身があります。今日でも、またいつの日でも、主は、主を信ずる者たちにこの献身を要求なさいます。そこになんのちゅうちよもあるはずがありません。うたがいとあやしみのある余地はありません。救い主は人々がこころの底から従うことを要求していらっしやいます。じっさい、ほかの人よりも大きな信仰と奉仕が必要である場合もあります。しかしながら、末日聖徒の生活をみると、どこにおいても同じ献身に目がつくのであります。それは日曜学校の先生、MIAの指導者、扶協会の役員、支部長もしくは勤労奉仕の宣教師であるかも知れません。そこに献身の姿があります。よろこんですべてをすてるとい行いは今もお神の教会の中に存在しております。

回心の結果、ほんとうに真理を中心にする生活へ入ったとき、この献身の精神がこころの中へしっかかりすわるのであります。自分を中心とするところがすっかりかわったときに、また救い主が仰せになった「新生」が生活にあらわれたときに、主の召しに際して損失

をかぞえることはないのであります。そこにはなんのちゅうちよもありません。何ものも主のみわざにかわるよいものではなく、主のみわざにかわる高価なものはありません。ほんとうに回心をして新しい生活に入るときは「まず神の国と義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」という救い主の命令をかならず受入れることになるのであります。ほんとうに回心をして、新しい生活に入るときは、このような献身の行いが平常自然に行えるようになるのであります。そこにはちゅうちよとはんばな行いはなく、条件付きの行いはありません。神の誠命を守ることは義務でなくて楽しみとなります。それは新しい生活にうまればかかった人にとつては、主につかえることがよろこびであるからであります。その人は給料日がくるときに「自分の一」を払うために生ずる損失をかぞえることはありません。つきあいや人によく思われるために守るべき標準をまげることがありません。祈ることを忘れません。安息日を守らないことはありません。つつしみ深さと美德をけがすことはありません。

末日聖徒にとつてイエス・キリストがお示しになった手本はほんとうの生き方になります。この幸福な道を行く人々は、義を渴望することを知っております。それでありますから、この人々は、世の人々に快樂を与えるに見える暗黒の道に心をかけることはありません。真理を中心とする生活にきりかえるということは、真理を全身心で受け入れることでもあります。またその生活を真理に順応させるといふことでもあります。私たちは俗世の人々の生活を聖徒の生活へきりかえます。回心または新生にはかわるといふ意味があります。その意味は自己中心と俗世の欲にふけることが、ほん

とうの喜びと大きな幸福と平安とにかわるということではなくてはなりません。

今日、この核戦争の危機が人類をおびやかしているとき、末日聖徒は、徒はひじょうに大きな責任を負っております。私たち末日聖徒は、神の御子であるキリストと十守架にかかって贖いをなされたこのキリストのことを世の人々にのべつたえ、このキリストこそまことの平和とよるこびのおや石であり、それらの湧き出るみなもとであることを高く叫ばなくてはなりません。キリストは、この世においてになりました「時の絶頂」に信者たちの小さな群をのこしておいでになりましたが、そのとき「わたしは平安をあなたがたにのこして行く。わたしの平安をあなたがたに与えるのは世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心をさわがせるな。またおじけるな」(ヨハネ伝十四〇二十八)とはっきり仰せになりました。

楽しさも平和も、主の道に従うこと、すなわち私たちの回心を実地に示すことによってだけ、私たちに与えられるのであります。私たちがちゅうちよすることなく、この「好機会」をのがさずに応じて、奉仕をせよというすべてのよびかけを喜んで受け入れるように。このようにして始めて、私たちの身も心にも、またほかの人々の生活にもほんとうの平和がくるにちがいありません。



ス イ ス 神 殿





ジョセフ・スミスに感謝をささげる

ビー・H・ロバーツ長老

「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金銀、宝石、木、草またはわらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はつきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現われてそれを明らかにし、またその火はそれぞれの仕事かどんなものであるかをためすであらう」

(コリント前書

三〇十一―十三)

ジョセフ・スミスが、主イエス・キリストの土台以外の土台を置こうとしなかったことはしあわせであった。もしもジョセフ・スミスがイエス・キリスト以外の土台を置いたなら、彼の仕事ははじめからのろわれ

ていたであろう。しかし彼の宣言した新しい神権時代の土台は神性と教義が最高度に発揮されたイエス・キリストであった。これ以外の土台はだれも与えることができなかった。さればジョセフ・スミスは彼の組織体系の中でキリストを最高の位置においた。ジョセフ・スミスの宣言に権威と神の能力とを与えたものは、キリストとジョセフのまごころと真実とであった。これがあつたからジョセフ・スミスの仕事はいつまでもほろびない。

キリストの土台の上になたてる人の仕事は、だれがしても、火によつてためされるようにためされなくてはならない。時もこれとおなじ効果をおよびす。ジョセフ・スミスの仕事はこれまで火によつてためされるように、時によるためしを受け、りっぱにそれにたえてきた。「主義」——「信仰」の福音の新時代をさすいた初期の運動が行われていたころ、いろいろな宗教や哲学が急にあらわれた。しかし、これらはみなほろびてしまつたか、ひじょうに小さくなつてしまつたか、または宗派の一つか哲学の一つかになつてしまつた。

われわれは、キリストが自分を証明された御ことをジョセフ・スミスのために言うことができよう。もしも彼がキリストの業をしなかつたなら、彼を信するな。しかし、もしも彼がキリストの業をしたならば、彼を信じなくとも彼の業を信じよ。すなわち神が彼と共に在したことを知るためである。彼ジョセフ・スミスが為した業、およびその業が百年以上にわたり精密な近代の調査、批判されてはあざけりや迫害にまでたえぬいてきた事実は、それらがすべて真理であるという実際上の証拠である。その福音と神の命によつて世の人々に与えた教会等は彼の正しいことを証明するものである。

この新しい神権時代の「予言者、聖見者」であるジョセフ・スミ

スト、その業とを説明する三つの種類の源がある。

第一は、彼を知つて居り、彼自身の価値を真正面に受けて彼を受け入れた人々、すなわち彼の熱心な弟子たち。

第二は、自分にとつて彼はとてもわからない神秘、すなわちなぞであつたという人々。

第三は、彼を異端者、にせ予言者以上の悪人と考え、どんな方法にせよ彼を除いたのは世の人々にとつて当然であると考え、彼の業をてつて的に破壊し、彼が地獄におちたら囃笑する人々、すなわちまかつたてつて的的な反対者、彼の敵であつた人々。

うちあけて言うると、私は第一に属する人間である。すなわちジョセフ・スミス信じ、ジョセフ・スミスがいと高き神の予言者であると信じている人間である。私は彼が啓示を受けて世の中に神の真理を確立したことを信じ、彼自身を無条件で信する人間である。私にとつて彼は一人の大霊であつた。大霊であつたから、彼は自分の中にあるすぐれた性質により、当然の要求として神の「偉大にして高貴善良なる霊」の一人となつたのである。この「偉大にして強力な霊」に神は権能と霊威とを加えたまい、これによつて彼は敏速偉大な悟りの力をもつ者となつた。

彼を信するこのような環境の中で私は成人した。私はひとり彼の物語を読めるまで、ずっと前から彼の物語を夢中になつて聞いた。その物語は、好意的にせよそうでないにせよ、彼についておおよけにされたいろいろな本から読んでもらった。その中には彼の英雄者な行い、おそれを知らぬ勇氣、友だちに対するかぎりない愛、神と神聖なものに対する敬けんの念、殉教するまでの彼の誠実さなどが物語つてあつた。私はこれらのことのために、今彼を愛してい

るように彼を愛した。

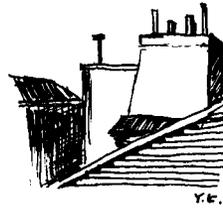
私は彼を普通人よりもはるかに高い人間にした彼の大胆な主張とすさまじい豪気な知性に感化された。とにかく、私自身の性質は何もかも破ることのできない彼の性質と結びついた。今は、ソロモンの時代のように、われわれの愛の目標には何らの欠点もなく、まったく完全であると言えよう。少くとも私の見ることができ感ずることのできる不完全は一つもない。

私が成人して分別ざかりとなり知識がまして、人間よりも真理をもっと尊びもっと愛することを知ったとき、私は新しい神権時代の予言者ジョセフ・スミスにも限界のあることがわかった。そして、行動の中に人間的の弱さと欠点のあることを気づくようになり、彼自身が説明しているように、彼も人間的な感情をもち他人に対して偏見をもつ一人の人間であることを知った。彼が自分自身の限界をこころよく認めたことよって、また別の美徳があらわれた。それよって彼はますます私にとってなつかしい人となり、私のところの中にある彼の高い地位はいささかも動かなかった。

私のため、彼をその高い地位に在らせよ、彼は神のしもべであり彼はそのことを知っていた。神よ、彼に正しい地位を与えたまえ。私にとって、また私のために、彼は最も高い地位にのぼり聖者となった「いと高き神の予言者」である。されば、とこしえにその高い地位に立たせよ。

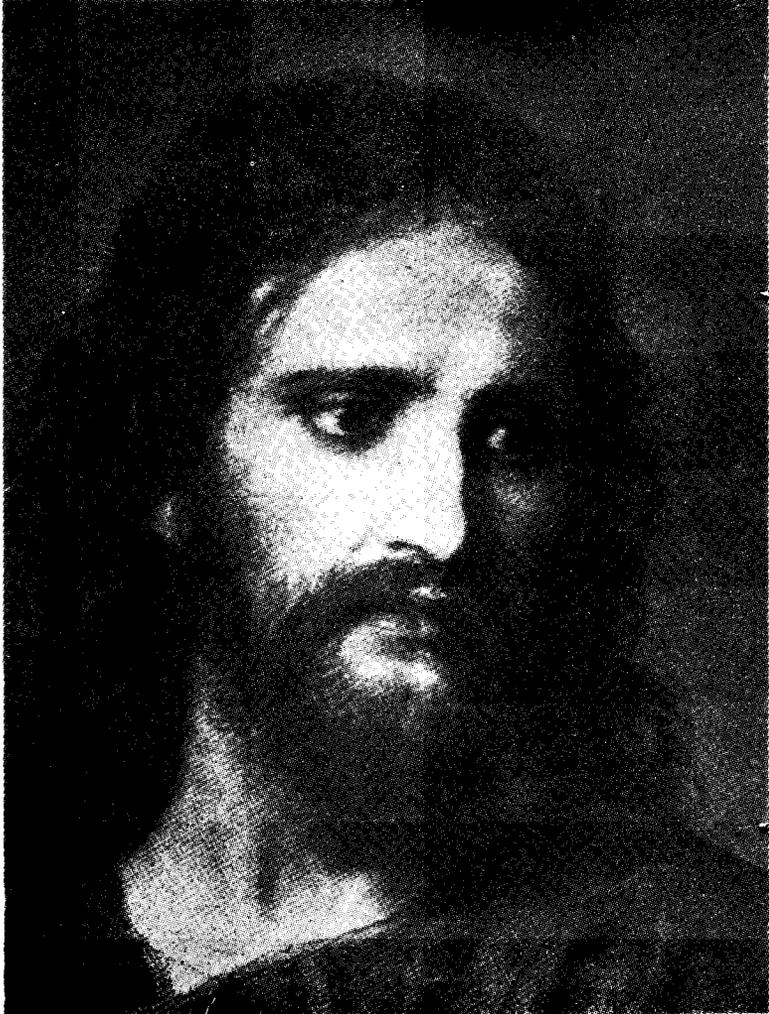
彼に関する知識の源となる他の二つ、すなわち彼らにとって彼がなぞであった人々と敵であった人々にはかつてに推測させかつてに怒号させよ。「何をしようと彼は彼らの力のおよばぬところに在る。」彼の追憶に不快な言辞をあびせかけても、神の摂理の中にある彼

の地位を愛することもできなければ、どのように彼を処分することもできない。彼は年と共に変わらぬ。彼の住家は神の国にあり、彼の業は永く地上につづくのである。（原文は千九百三十二年十二月のエラ誌にのった記事から）。



ほんとう の クリスマス の話

W.
クレオン・
スカウセン



キリストの降誕をお祝いした文字通りはじめてのクリスマスほど感激的なクリスマスはかつてなかった。しかしながら奇妙なことに、その最初のクリスマスのこと完全に語っている歴史はほとんど見あたらない。現在クリスマスの際に見られる大さわぎが告げていないクリスマス真相が、聖書の中にうずもれて忘れられてしまっている。この一文を書いた目的は歴史の記録にのこされている通りにほんとうのクリスマスを語ることである。

「歴史的背景」

はじめに、キリストがお生れになった当時、ユダヤがローマの占領下にあったことを忘れてはなるまい。キリストの降誕より約六十年前にエルサレムはローマ軍の戦車にじゅうりんされ、敵将ポムペイはローマの軍旗をシオン山の上にとたてた。

その後ひきつづきユダヤはローマ軍の占領するところとなっていたが、ついにアウグスタス、シーザーは、ざんにんでわる賢い一人のアラビヤ人を権力の座につけてユダヤ国民を統治させた。その男の名はヘロデ、ユダヤの民は彼をヘロデ大王と呼んだ。

ヘロデはおもてむきユダヤ教に改宗したようなふりをした。そして、壮大な神殿を建てる事業を始めた。彼はユダヤ人であるマリヤムネをたてて王妃とした

が、その間に生れた二人の男の子にけつして自分のあとをつがせなかつた。そして自分の王座を守るために人殺しさえあえてしたが、ユダヤ人たちが王妃マリヤムネとユダヤ人の血をひいている二人の息子たちを熱狂して迎えることを見るや、命を下して三人とも暗殺させてしまった。ヘロデの犯したこのような悪い行いやそのほかの罪をみてユダヤの民はこころの底から彼をいやしんだのであつた。

「ほんとうのクリスマスの話は神殿から始まる」

ローマ暦七百五十二年、ヘロデが六十才をこしたときに新しい神殿の中心部はまったくできあがつた。「ほんとうのクリスマス」の話はこの神殿の中からはじまる。

ある日のこと、昔のレビ人の祭司が一人、祭壇のところを務めを行うために神殿へきた。この祭司はザカリヤという名の人であつたが、多くの民衆がそとで待っているあいだ、祭壇のある聖所へ入つて香をたいていた。ザカリヤは聖所に一人だけ立っていたが、彼のま正面には神聖な幕があつて、そのうしろには「至聖所」があつた。そして幕の前には黄金の祭壇があり、その上の香炉の中には昨夜たいた香ののこり火があつた。右手の方にはそなえのパンの卓があり、左手の方には黄金の燭台があつて、部屋の中にあるあかりはこれだけであつた。

ザカリヤはこの日神殿へきて祭司のつとめを行っていたが、彼のむねのなかにはながい間熱心に祈りもとめていた一つのねがいがあつた。ザカリヤには子どもがなかつた。彼は男の子をぜひ授かりたいと熱心にねがっていたのであつた。ザカリヤもその妻も今は年老いて子どもを授かるのぞみもなくなっていたが、それでも、それまでの習慣で彼はなお熱心に祈りを神にささげていた。彼が祭壇に近づいたとき、彼のこころの中にあつたもつとも切実なねがいはこのことであつた。

そのときザカリヤはとつぜん止まつた。彼の目は、聖所の中のかすかなあかりを圧倒するかがやきをもってあらわれたお方のためにくらんでしまつた。一人の御使が香壇の右に立っていた。そしてそのまわりは強烈な聖光にひかりかがやいていた。

その時を去る過去四百年の間に一度もなかつた神の啓示が、このときはじめユダヤ人の一祭司に下つたのであつた。

「クリスマスを告げる使いがはじめてあらわれた」

このときザカリヤはおそれおのいてその場をさがりはじめたところ、その御使いは「おそれるなザカリヤよ、あなたの祈りが聞き入れられたのだ。あなたの妻エリザベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけたまは」と言つた。このことばを聞いて、けんそんなレビの祭司ザカリヤは自分の耳を信ずることができなかつた。しかし、御使いはつづけて言つた「彼は主のみまえに大いなる者となり……とのえられた民を主に備えるであらう」と。これはザカリヤにとつてとんでもないことであつた。彼の年老いた妻が男の子をもうけることがあるだろうか。そんなことのあるはずがない。彼の妻は年をとりすぎている。このような疑惑の念を抱いてザカリヤは御使いに挑戦した「どうしてそんなことが私にわかるでしょうか。私は老人です、妻も年をとつています」と。

ザカリヤを見おろした御使いのまなざしは永遠のように深いまなざしであつたにちがいない。ザカリヤよ、なんじは神の力をうたうのか。なんじはサムソンの母、サムエルの母、イサクの母のことを忘れたのか……これらの母はみな天からとくべつ祝福をさずかつてその子を産んだのではないか。さもなければ、なんじは御使いの権能にうたがいを抱くのか。

その御使いはおこそか調子でザカリヤをせめて言つた「私は神の前に立つたブルエルであつた、このよこばしい知らせをあなたに語りつたえるためにつかわされたものである。時がくれば成就するわたしのことばを信じなかつたから、あなたはおしになり、このことの起る日までものが言えなくなる」と。

そう言つてしまつと、すぐ御使は行つてしまつた。

ザカリヤはおどろきのあまり気がとおくなつたような状態で、やつと自分の務めである香をたきにかかつた。そして、香のけむりがへだての幕の上へのぼつたときに、レビの祭司ザカリヤは民衆の前に出てきた。

なぜこんなながい間かかったか。ザカリヤはそのわけを言おうとしたが、ものを言うことができなかった。ザカリヤは手まねでもって、聖所のなかで神の示現があらわれたことを民衆にわからせた。

「忘れられた王家のすえの住所―ナザレ」

エルサレムを北に去る百マイルのところに、ガラヤの丘にとりかこまれた或る平原がある。ザカリヤの時代に、その平原の中にナザレと呼ばれた農村がひっそりとしずまりかえていた。この村に或るイスラエルの娘が住んでいたが、これこそ後世、世界で一番名高い婦人になった娘であった。彼女の名前はミリヤムと言った。今日私たちは彼女のことをマリヤと言っているが、これはギリシヤ語によってこれらでつたえられた名前の近代訳にすぎない。

ミリヤムという名前はユダヤ人の中にひじょうによくある名前であった。それはニーファイ人の予言者たちが予言したように、ユダヤの予言者たちもメシヤの母となる婦人の名前はマリヤ(ミリヤム)と言ふ、と予言したからであると思われる。

血統によれば、ミリヤムは王家の娘として生れたのであった。彼女はダビデ王の直系であつて、おなじダビデ王の血統に属する或る若者と婚約をしていた。この若者の名前はヨセフと言つた。しかし、その当時この王家のあとつぎである二人がナザレの村に人しれず住んでいたことは、世の人にとつては知らないささいなことであつた。むじひな世界征服者たちの奪取と貧困とによつて、ダビデの王家をつぐ当然の権利をもつたあとつぎたちは、人に知られず名も知られないままうずもれていたのであつた。

「クリスマスを告げる使いが再びあらわれる」

ザカリヤにあらわれた御使ガブリエルが、ナザレのマリヤにもあらわれたのは、ザカリヤにあの示現があつたちょうど六ヶ月後のことであつたと思われる。

この天の示現がマリヤにあらわれたとき彼女はたったひとりで居た。ザカリヤがひじょうにおどろいたように彼女もまたひじょうにおどろいたのであつた。御使いの光がとつぜんかがやいたのを見

て、マリヤはしばらく氣も失わんばかりであつたが、彼女が口を利く前に御使いがガブリエルの挨拶が耳に入った「めぐまれた女よ、おめでとう。主があなたと共におられます」。

このことばを聞いてマリヤは思はずあとじさつたが、御使いは時をうつつさずはつきりとなぐさめることばをかけ「おそれるな、マリヤよ、あなたは神からめぐみをいただいていゝ」とつづけて言つた。

それから、彼女に確信と理解を吹きこむつもりで貴いことばをおごそかにつたえて言つた「見よ、あなたは身ごもつて男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。彼は大きいなる者となり、いと高き者の子となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配はかぎりなくつづくでしょう」と。

マリヤはその意味がわからなかつたので「どうしてそんなことがあり得ましょうか」とたずねた。すると「聖靈があなたにのぞみ、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆゑに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子となえられるでしょう」ということばがあつた。

マリヤは感激にふるえて、深い宗教心と美しい性格をうつつし出していることばでこれにこたえました「わたしは主のはしたためです。おことばどおりこの身になりますように」。

「ガブリエルは誰であるか」

自らガブリエルであるとか名のつた御使いは、ほんとうに誰であつたか、マリヤがザカリヤのどちらかがこれを知っていたかどうかはわからないことである。それにもかかわらず、この先ふれをする天



の御使いは美しいおとめマリヤの前に立って感激にふるえたにちがいない。彼はマリヤが貴い家筋の娘であることを知っていた。彼はマリヤの生れる何百年も前に数々の予言者が、彼女こそメシヤの母となる者であることを明らかにしていることを知っていた。ガブリエルはまた、彼女マリヤが、彼自身のすえであることも知っていた。

自らガブリエルであると名のついでこの天からの使者はほかならぬ予言者ノアであった。マリヤがこの御使いのひかりかがやく御顔をあおぎ見ていたとき、彼女は自身の族長である先祖のまだ復活しないさきの霊のすがたを見ていたのであった。

ガブリエルは自分のつげるべきことばをうけおわると、再びマリヤに、彼女の年とつたいとこにあたるエリザベツも身ごもつてはや六ヶ月になるということをうらあけて去った。

マリヤはひとりになると、御使いにづけられたことばをたいせつに胸にしまつて誰にもうちあけなかつた。彼女の両親にも、彼女が深く愛していたヨセフにさえもこのことを知らせなかつた。それにもかかわらず、彼女が自分の胸のひみつをうちあけた方がよいと思つた一人のひとがあつた。それはほかでもないエリザベツであつた。そこで、彼女はまっすぐに急いでエリザベツのところへ行つた。

マリヤが家を出る数日前に、おそらくたつた二・三日前に神の栄光がマリヤをめぐる照らし、マリヤのために新しい生命の奇蹟が始まつた。

「イエスの母バテスマのヨハネの母を訪ねる」

ザカリヤとエリザベツとは、エルサレムからほど遠くないところにあるエダヤの山里に住んでいた。そこへ行行くまで、百マイル以上もある足もとのあふない道を旅行するのはたいへんなことであつた。マリヤがエリザベツの家へついたとき、エリザベツは喜んで迎えた。年とつたといふは若いマリヤを心から歓迎し、主のみたまにみたされて「あなたは女の中で祝福されたかた、あなたの胎の実も祝福されています」と声高く叫んで言った。そして、けんそんなこ

ころで「主の母上が私のところにきて下さるとは、なんとという光榮でしょう」とつけくわえて言った。

マリヤは、エリザベツがすでにマリヤの大きなひみつを知っていることを悟つて手みじかに「わたしのたましいは主をあがめます」とこたえた。

それからひきつづき三ヶ月のあいだマリヤはエリザベツの家に居て、エリザベツが出産するときを待た。いよいよ子供が産まれてみると、前に御使いがガブリエルが予言をしたとをりそれは男の子であつた。両親のザカリヤとエリザベツにとってこれはすばらしい祝福であつた。親戚も隣人も友人も一同こぞ喜びに加わり、この年とつてから思いがけなく生れたおきな兒になんと命名するかを見るために集まつてきた。

「バテスマのヨハネ命名されて神権を受ける」

しかしながら、実際に命名式がはじまつてもまだ式を執り行なう祭司は幼兒の名をきめていなかった。そこで家内中の者がきかな議論をはじめた。エリザベツは幼兒の名はヨハネにしないではいけないと言つた。これにはらをたてた親戚の男たちは、祭司にむかつて幼兒には父の名にちなんで名前をつけよと言つた。

とうとう、エリザベツが反対をととなえずげているとき、人々はザカリヤのところへどうしようかと言つてきた。ところがザカリヤは口が利けないばかりか、耳もきこえなくなつていたので、人々はこのことを身ぶり手ぶりで彼にわからせた。このときザカリヤは書き板をもつてきてくれという意味を伝えたので、人々が書き板をもつてくると、ザカリヤはそれに「ヨハネ」と書いたので親戚の者はみな不思議に思つた。親戚の者たちは、この信心深いレビ人ザカリヤが、かならずこのただひとりの幼兒に父である自分の名を名のらせたいと思つているにちがいないと考へていたからである。

しかし、それについですぐに或ることが起つたので人々はおどろいてしまった。それはザカリヤがとつぜん物を言いはじめたからである。それまで一年ちかくも物が言えなかつたのが、このときはじめて口をきくことができるようになった。ザカリヤは声高く叫ん

で言った「イスラエルの主なる神はほむべきかな」。

それから自分の幼児をほこらしげに見つめながら予言のみたまに満され、「おさなごよ。なんじはいと高き者の予言者と呼ばれるにちがいない。なんじは主の前にさき立って行きその道をそなえるからである」と宣言した。

それがあってからその日のうちに、おそらく人目のつかぬうちに御使いがきてこの幼児ヨハネを神権者に按手聖任したと思われる。歴史がはじまってからこのかた、このような手つぎがとられたことはなかったから、この幼児はとくに選ばれた者であって生まれたときから聖靈にみたまされた。このヨハネにつき後になって救いたもしたしく「女の産んだ者の中でバプテスマのヨハネより偉大な予言者はない」と仰せになった。

「マリヤ、ナザレにかえる」

さて、マリヤは故郷のナザレにかえったが、そこにはヨセフがしきりに彼女の帰りを待っていた。

マリヤが身重になっていることにヨセフが気づいたのがいつであったか、それは解っていないが、ヨセフはそれに気がついたときひじょうに悲しんだ。ユダヤの律法によると婚約者はすでに結婚をしている者と同じ嚴重なおきてにしばられると、不貞の罪を犯した者は死罪に処せられた。それをまぬがれさせるには、公式の離縁状を出してマリヤを離縁するほかはなかった。ヨセフはけっしてマリヤにつらく当るころはなく、ただあわれと思っただけであつたら「ひそかに離縁」をしようとしたところをきめた。

このようなげいしい感情にくるしんでいるとき、マリヤは一言も弁解をしなかった。実際に、マリヤはこのことについて主なる神がどうしようとしておいてになるか知らなかつたとおもわれる。マリヤの知っていたのは、自分の神聖な使命がヨセフとの婚約を失わせるかも知れないということだけであつた。

ヨセフが将来に期待していた結婚の計画がとつぜんむざんにうちやぶられたことを、熱に浮かされたように何ごともかえりみずに考えこんでいた暗い夜、主の御使いが霊夢のうちにあらわれて「ダビ

デの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内にやどっているものは聖靈によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼はおのれの民をそのもろろの罪から救う者となるからである」と告げた。

この啓示によってヨセフが、マリヤの神聖な召しについてうるわしい同情にみちた理解ができたとき、彼のころは悲しみからうってかわって喜びにみたまされた。誰が彼のころを充分にあらわしてみせることができるだろうか。またヨセフがマリヤに、彼女の胸にひめた真相をよく了解したことを告げたとき、誰がその場のうるわしい情景を筆にすることができようだろうか。

それからヨセフはマリヤとすぐに結婚をしたにちがいない。それは天の使いがそうせよと告げたからである。皇帝の命による人口調査が行われるときには、すでに妻と呼ばれることになっていた。

「イエスはいつお生れになったか」

ヨセフとマリヤがベツレヘムへきたのはローマ暦七百五十三年の四月の初期であつた。

これらのことがいつ起つたか、その正確な日附は千八百三十年に主が啓示によって「われらの救い主なるイエス・キリストが、肉身を以てこの世に來りたまひてより千八百三十年にして第四の月すなわち四月の六日」(教義と聖約二一〇一參照)とはつきり仰せになつてはじめてわかつた。これより前には誰もくわしい日附を知っていなかつた。その道の大家によると、第四世紀になつてはじめて十二月の二十五日にクリスマスが祝われた。十二月二十五日にクリスマスが選ばれたのは、当時その日がローマ人の神であるソールの誕生を祝う國民の祭日であつたのによる。それからクリスマスは十二月二十五日ときまつてしまつたのは単に便宜のためだけである。救い主の誕生なきはんとこの日附が啓示によって断言されたのはまことにふさわしいことであつた。

ベツレヘムはもと「ダビデの町」であつたので、マリヤとヨセフにとつては先祖の地であつた。ユダヤの地以外では、ローマ政府は人民に対し、その住居するところで税のための登録をするよう

に命じていたが、パレスチナではこれと異なり、ユダヤ人たちはその先祖からの慣習にしたがい、登録をするために先祖の住んでいた地方へ帰ってくることをゆるぎされていた。こういうわけでマリヤとヨセフはベツレヘムへきたのであった。

二人とも金もちであつたわけではなく、またマリヤが身重になつていたので二人はベツレヘムへ早く行くことはできなかった。ヨセフとマリヤがベツレヘムのちかくへきてみると、すでに近くからきている群集によつて市中はいっぱいになりはじめていた。ベツレヘムはエルサレムからたった六マイルしかはなれていなかったで、宿に入れない群集はベツレヘムへあふれて行つて、小さなベツレヘム



はなおさらごつた返すことになつた。実際、このときはまた「すぎこしの祭り」の季節とかさなつていた。「すぎこしの祭り」だけでも、エルサレムやその近くのベツレヘムのようなところへ、いつもたいへんな群集が集まつてくるのであった。

「最初のクリスマス之夜」

ヨセフとマリヤの長い旅もおわりにちかざうたころ、二人は丘の上で草をたべている羊の群のかたわらを通りすぎた。二人の先祖のダビデが若いころ羊の群を守つていたのはこの地であつた。二人の母方の先祖のルツが穀物畑で落穂をひろつていたのはこの地であつた。

ヨセフとマリヤの二人にとりこはふるさとであつて、一步一步をふむごとに、そこには神聖な歴史がみちみちていた。

しかし、ダビデの町は二人をころよく迎えなかつた。二人がベツレヘムの村中に入つていよいよ増したにちがいない。今夜はどこととまろうか。どこへ行つても人々は「おあいにく」と言つてことわられていた。

時間がたつにつれて事態は絶望的になつてきた。マリヤの大きな使命を知つてゐるヨセフにとつて、誰も三人をとめてはくれないということは不可解におもえたにちがいない。誰か助けてくれやうなものだ。すでに陣痛を感じているマリヤにとつては、ほんとうにどこか居ごちのよい便利な場所がなくてはならない。しかし、どこへ行つても「おあいにく」の一言でことわられたのであつた。

心配とあせりのあまり、とうとうヨセフは、ふつうの時ならこんな所と言つて見むきもしなかつた場所をその夜の宿とするほかはなかつた。そこは牛や馬を入れておく所であつた。ヨセフのころころは、動物を入れておく場所へ心配におのいてゐる新妻を連れて行くとき、さぞかし底の底から痛んだにちがいない。ヨセフはいそいで、ほんとうに名ばかりの居ごちのよいところをさがした。ヨセフが近くの宿屋からおよぶかぎりのものを得てマリヤの助けにすることはできたであらうが、それとてたかだかひどく不十分なもの

であったであろう。王と名のつく人でこのように粗末なところで生まれた人は、救い主をのぞいてその例がない。

この年、すなわちローマ暦の七百五十三年に、ユダヤの国民はこれが彼らの救いの年、すなわち彼らが待ちに待ったメシヤのお生まれになる年であると思つたことであろうか。天上高く日の栄の宮廷においては、エホバの大神がいまやこの世に生まれて肉身をとりたもうのを御使いの群が今か今かと待ち受けていた。これが歴史を二分する瞬間であった。たしかに、アダムからマラキに至るまでの昔の聖徒たちは、今や世界の歴史をかえる一大事件がはじまろうとするのを熱心に待ち受けていたにちがいない。

そこからたつた一マイルはなれたところ、ベツレヘムの郊外にちかいたところの空を舞いながら、あの御使たちは自分らの居ることを知らせるのを待ちかまえていた。その夜野に居て羊の群の番をしていた羊飼いたちが、この壮大な示現を受ける者として選ばれた。それはマリヤが貴い幼児を産みおとした瞬間にはじまった。このときすぐに羊飼いたちは霊の眼が明らかになって、御使いが彼らの前にあらわれ主の栄光が彼らをめぐり照すのを見た。

羊飼いたちはこれによって焼きつくされるかと思ひ、おそれおののいてしりごみをしたが、その御使いは言った。

「おそれるな、見よ。すべての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝える。きょうダビデの町にあなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼児が布にくるまていかばおけの中になかしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」と。

このようなときに、天の軍勢はもはやあらわれずには居れなかつた。昔の聖徒たちの壮麗な合唱はいっせいにひびきわたつた。羊飼いたちはその聖徒たちが唱うのを聞いた。

「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、人にはめぐみあれ
みあれ」

この示現がやむと、羊飼いたちはすぐに去つてベツレヘムへ行き「がいばおけの中にねせてある」幼児のいるところをさがした。た

ぶん、この羊飼いたちは、けものあぶらを燃やす燈明の光がちらちらと暗の中にみえるのをたよりにけものを入れる小屋の入口へたどりついたことであろう。そして、羊飼いたちがまるく集つたとき、彼らはほんとうに「布にくるまていかばおけの中になかしてある」幼児をみつけた。

しかし、うまれたばかりの赤ん坊ががいばおけの中になかしてあるほかに、この羊飼いたちのところに強い印象を与えるかわつたことは何もなかった。羊飼いたちが見たのは身分のいやしいガリラヤの農夫とその妻と今生れた赤ん坊と、それだけのことであった。これらの者のまわりには何の後光もさしていなかった。それにもかかわらず、彼らのこのころの中にはさきに見た主の栄光があざやかに焼きついているので、今安らかに眠っている幼児をけいけんな畏れをもって仰ぎ見たのであった。今やエホバの大神は肉身に宿りたもう



たのだ!

「人の知らない王者」

羊飼いたちはついにそこを去って、彼らの友だちや隣人をよび起すために急速に走って行った。彼らのことばに耳をかたむける人には誰にも、彼らは前夜見たふしぎな示現と、この新しく生れた幼児について言われたこととを話してきかせた。しかし、この話をきいた人々は何にも、ところとめなかつた。聖書にはこれらの人々はただ「ふしぎに思った」と書いてある。それにもかかわらず、このようなことで羊飼いたちの熱いおもいはすこしも冷えなかつた。彼らは「見きされた事が何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら」各々の羊の群へかえって行った。

このようにして、最初のクリスマス朝はそれ以上何も起らずに過ぎて行った。幼児がねむっている間に、マリヤはこの時のすばらしい歓喜をしつかり自分の胸にきざみつけておいた。

このときあの博士たちはどこに居たか。クリスマス朝の劇にはいつも博士たちが出てくるが、救い主が誕生なさった夜に博士たちはその場にきていなかつた。実際、この博士たちの故国は「東の方へ」はるか行つたところにあつたので、この最初のクリスマス朝にはアメリカ大陸のニーフアイ人と同様、故国で天に大きな新星がとつぜんあらわれたのを見て喜んでゐた。昔、予言者たちは人々に、この星があらわれるのは救い主がお生れになつたのであると知れと言つておいた。それであるから、この星を見た博士たちはすぐに支度をしてパレスチナの地へむけて旅立つた。博士たちはこのすばらしい幼児に会つてひれふしておがみ、自分たちのおくりものをささげたいと思つた。しかしそれは長途の旅行であつた。すぐにわかるように、聖書を見ると博士たちが数週もしくは数ヶ月におよぶ長旅のあげくベツレヘムへ着いたことが明瞭である。

やがて、マリヤとヨセフは新しく生れた幼児のためにさだめてある律法や儀式をかけなく行つ用意をした。幼児が生れて八日め、人々はこの幼児に命名をするため祭司のところへつれて行った。その

とき人々がこの幼児につけた名前は「ヨシユア」であつた。これはユダヤ人の中にくらでもある名前であるが、御使いの指図に従つてこのように命名をしたのであつた。後になつて人々は彼のことを「ナザレのヨシユア」と呼んだが、これはほかの「ヨシユア」とはつきりくべつをするためであつた。今日私たちが「ヨシユア」のかわりに「イエス」と言っているが、これは「ヨシユア」に相当するギリシャ語の変形にすぎない。この名前は救い主の使命をよくあらわしている、それは「エホバはわが救い」という意味をもっているからである。

「イエス神殿でささげられる」

この命名式があつてから、マリヤはさだめられた「きよめ」の間がすぎるまで三十二日の間しづかに待つた。それがすぎると、ヨセフとマリヤは神殿でイエスをささげるために六マイルの旅をしてエルサレムにのぼつた。この男の初子を神にささげるのはモーセの律法によるさだめであつた。

またこの場合、律法に従つて子山羊と一羽のはとをさせいとしてささげなくてはならなかつたが、貧しい者は二羽のはとをささげてもよかつた。マリヤのささげものが二羽のはとであつたことは、そこに意味がある。

このときエルサレムに住んでいたシメオンという賢い信仰深い人があつた。この人は主なる神に対して忠実であつたから、主のつかわしたもう偉大なメシヤに会うまでは死なないという啓示を受けていた。

この日、シメオンがエルサレムの都で仕事をしていたとき、とつぜん彼は聖靈に感じいそいで神殿に入つた。ちやうどそのとき、ささげものをする儀式がはじまるところであつたが、シメオンは聖靈にうながされていそぎ進み出で、その幼児をやさしく母親の手から自分の両手に抱きとると、天を仰ぎ見て深い感動をおぼえながら言つた。

「主よ、今こそ、あなたのみことばのとおり、このしもべを安らかにさせて下さい、わたしの目があなたの救いを見たのです



から。この救いはあなたが万民の前におそなえになったもので、異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります。

それからシメオンはマリヤの方に顔をむけ、予言のみたまにみたされて、この幼児に託された大きな使命のことを語り、また母親として「つるぎで胸をさしつらぬかれる」ような苦しみを受けなくてはならないと言った。三十三年後に、カルバリの山の上で十字架の下に立ったとき、マリヤはシメオンの言ったかなしい予言のことをしみじみかみしめていた。

またこのとき神殿の中に、予言のみたまにめぐまれているひじょうに信仰の深い有名な女の人居た。この女の人はそのとき八十四才になっていて、夜も昼も神殿に居て主に仕えていた。この女の人はその名をアンナと言ったが、シメオンとおなじく聖霊によって、

イエスが待ちに待ったメシヤであるとあかしをした。そして、居あわせたすべての人々にあかしをし、今まで生きて救い主をこの目で見ることができたことに感謝をした。

儀式をすませてヨセフとマリヤはイエスをつれて故郷のベツレヘムにかえった。それまでに彼らは「家」を得てすまっていたことを福音記者のマトイはとくにしている。

「博士の来訪」

博士たちが、新しく生れたユダヤ人の王を探してエルサレムへ来たのはそれからしばらくあとのことであった。当時のパレスチナ地方の事情についてはまったく無心であった博士たちは、王のところへ行ったら新しく生れた王はこれだと言った。しかし、ヘロデは博士たちのことを聞いて内心ひじょうな不安を感じた。ヘロデは内心、この博士たちはユダヤの王となる幼児が生れたとかく信じているが、この話を聞いたら今一般民衆の間に急速にひろがっている或る物語はほんとうのことだと受けとられるにちがいない。しかもその物語のもととは言えば、キリストとなる幼児がすでに生れたとおごそかにあかしをしている或る予言者たちの口から出たことなのだ、これはすてはおけないと思つた。

ヘロデはいそいで祭司長たちと律法学者たちを全部あつめて、言いつたえと予言によるとキリストはどこに生れるのかと彼らに問いただした。彼らは言った「それはダビデの町ベツレヘムです」と。これを聞いて、ヘロデは気の狂つたようにある策略をめぐらした。自分の妻子を殺してまでも王位を守つたのに今だまて見ている法があるか。迷信深い民衆が待ちに待ったメシヤすなわち神聖な王であると主張して立ちあがるかも知れない、極悪の王位請求者にだまされて王位をうばいとられる法があるか。このように死にもの狂いの憎悪の精神を抱いて、ヘロデは一人のこらず幼児を殺してしまおうと計画した。

そこでヘロデは「ひそかに」博士たちを呼んで、かれらが故国ではじめて大きな新星のあらわれたのを見た時についてくわしく聞き

出した。そして彼らをベツレヘムにつかわし、行つてその幼児を見つけたらわたしに知らせてくれ、わたしもその新しい王をおがみに行くからと言つた。博士たちは王のことばを聞き入つて出かけた。

博士たちは夜道をベツレヘムにむかつていそいで行つた。その途中、博士たちはかつて故国の空にあらわれて救い主の誕生をつげたあの星がまた大空にキラキラとかやいてゐるのを見てひじょうに喜んだ。博士たちは聖なる幼児の居るところへ導びかれたと思われ、しかしそこは動物を入れる小屋ではなくなつてゐた。ヨセフもマリヤもずっと以前からもつとよい「家」に住んでゐた。マタイ伝によると博士たちは「家」に入つてマリヤのそばにゐる幼な子に会ひ「ひれ伏しておがみ、また宝の箱をあけて黄金、乳香、没薬などのおくりものをささげた」としてある。

それから、博士たちが立ち去る時がきたとき、靈夢の中に主の御使いがあらわれ、ヘロデのところへ帰らずに別の道を通つて「東方へ」帰れと命じた。博士たちはこの命に従つた。彼らは人の知らなところからきて人の知らないところへかえて行つた。これ以上何も知られてゐない。何人きたか、どの国の人か、それもわかつてゐない。博士たちについてこのほかに言われていることはみな架空の物語にすぎない。彼らが歴史の上のこしたあととは十二節にたらぬ聖句である。

「幼児の殺戮」

ヘロデは東方の博士たちのかえりをじりじりとした気持ちで待つてゐたが、かえるのぞみがまったく絶えたことを知ると烈火のごとく怒り、ベツレヘムをめぐつてい的に搜索して二才以下の男の子を探し出し、一人のこらず殺してしまへと傭兵たちに命じた。ヘロデが博士たちにむかい、救い主の誕生をしらせる星がはじめてあらわれた時を根ほり葉ほりたずねたことから、二才以下の男の子をみな殺せと命じたことは明らかである。

兵士たちはすぐさまヘロデの命令に従ひ、無力の民に空前のおそるべき犯罪を行つた。しかし、イエスはその場に居なかつた。あの博士たちが東方へむかつて立ち去るや否や、一人の御使いがあらわ

れ、マリヤと幼児とをつれてエジプトへ行けとヨセフに命じた。三人は命に従つてエジプトへ逃れ、ヘロデの憎悪がベツレヘムの母親から二才以下の男の子をうばつてことごとくこれを殺すまで、そこで安全に待つてゐた。

しかし、ヘロデがこのおそろしい「幼児の殺戮」を冷酷にも命じたとおり、また冷酷な報復の手はヘロデの生命の上にものびてきた。ヘロデが、王座を保つためにはその靈を売りわたしてもよいと考へたその時、彼は最もいまわしい病気で自分が死にかけてゐることを知つた。

ヘロデは死ぬ前の数日間、最も大きな苦しみになやんだ。死ぬ五日前には自分で自分の命を絶とうとさへした。死が近くにせまつてゐるとき、ヘロデは最も親近の廷臣たちでさえ彼にそむいてゐることを知つた。彼の目の前で王国はむざんに崩れはじめてゐた。百年たたぬうちに、この悪名の高い人物の子孫は地球の上から一人のこらず抹消されてしまふことであらう。

熱と苦痛にさいなまれたヘロデにとつて、とうとうやつてきた死はむしろ喜んで迎へられた。ユダヤの民にとつてヘロデの死はめぐみであつた。国民はお祭りさわざしてヘロデの死を祝つた。

熱帯の河ナイルの下流に沿つた地方で、ヨセフとマリヤは幼ないイエスと共に時節を待つてゐた。そのとき、一般人民にしろせが行きわたるさきに、ヨセフは御使ひからヘロデの死を知らされた。三人はすぐさま故国へかえる旅支度をした。

あきらかに、ヨセフとマリヤはベツレヘムに永住したいと思つてゐたけれども、三人がベツレヘムの地方に近づいたときに、ヘロデの残忍な息子アケラオがかわつてユダヤを治めてゐることを聞いた。彼らは長旅に疲れてはいたがそのまま旅をつづけガリラヤの丘をこえ、ついにナザレに到着した。そして彼らはここにおちつくことにきめた。

すべてこれらの場合を見ると、三つの大きな予言が文字通りに成就してゐることがわかる。すなわちイエスはベツレヘムで生れ、エ

ジプトから出て来て、ナザレ人と呼ばれるという三つの予言である。

この一つ一つの予言は互いにむじゅんしているように見えるけれども、神の知恵によって、三つとも完全に事実となつてあらわれた。救い主の一生を見ると、救い主について言つた予言者の約束は一つたりとも果されてはいないものはない。

年がたつにつれて「イエスはますます知恵が加わり、背たけものび、そして神と人から愛された」と聖書にしている。イエスは導きと教えを授ける天使から教えを受けた。三十三才になつて、イエスはついにこの世に生れてきた使命を完成する備えをした。最後の瞬間でも自分が望むならあととどりをすることができたのにイエスはあととどりをしなかつた。イエスは、人類と地球およびその上にあつたあらゆる生命を救うために、身を落してあらゆることを経験した。救い主の使命が目ざすところは、多くの人々が考えているよりはるかに広いものであつた。

「ほんとうのクリスマス精神」

さて、以上結論したのはクリスマスについて知られている歴史である。このほかのものはすべて人間が自分で新しくつくり出したものであつて、たとえば美しいあかりをつけた木は異教のローマ時代から、花輪とヤドリ木は昔の神秘なドルイツの僧侶から、みんなの胸をおどらせる聖ニコラスの訪問は第四世紀のキリスト教徒の伝説から起つたものである。そして楽しいサンタクロースはまったく近代空想の産物にほかならない。

しかし、それにもかかわらず最もたいせつなもの、すなわち「地には平和、人に対してはめぐみ」という精神は今なおのこつてゐる。

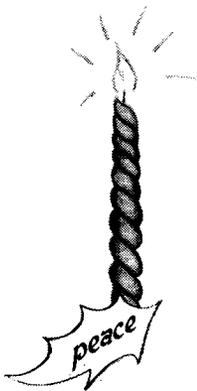
クリスマスの時ほど、平和が現実に世界一般の人々の身近かにせまってくる時はほかにない。一年中でこの時ほど、人がいつもよりもっと多くの友人を思い出し、もっと多くの敵をゆるす時はない。しかしそれも、将来くることの前ぶれにすぎない。

現在私たちの身近かに、天の軍勢にとりまかれて、今まで私の説

いたイエスは再びこの地球に帰ってくる時のために今日働いておいでになる。その日はすばらしい日であるにちがいない、おそらく私たちが予期しているよりもずっと早くくるであろうが、その日がきたとき私たちはそれを「福千年」の時と呼ぶ。「福千年」こそ千年の間この地球上につづく「クリスマス」の期間である。

☆
☆
☆

☆
☆
☆



ある
聖研より

(聖書研究会)

日曜ごとに、庭の柿の葉と青空との模様があざやかに
なっていくこのころ、聖研も活潑な議論が展開される
ようになりました。



司会 ふたたび安息日の問題ですが、ここで

A イエスは安息日の律法を自分でやぶつてい
ますね。

A ダビデも禁じられたことをしたのだから
自分がしてもいいという理屈とかんがえる
と変ですね。

H キリストなら安息日になにをしてもいい
というのですか？

C パリサイ人は厳格に安息日をまもってい
たが、それは儀式的なものだったのです
ね。断食のほんとうの意味はひとを助ける
ためです。それを誇るためでないことを強調し

ているわけですね。

K キリストならまちがったことをする筈は
ないから、なにをしてもいいんでしょう。

A キリスト自身が安息日をつくったのだから、
ここではそういう見地からいっている
のでしょう。

B キリストがきて律法をやぶつても、律法
はくずれるかもしれないが大本はキリスト
であるとするばやぶれないわけですね。

O 人の子というのはキリストだけだろう
か。

T マルコ伝2章に人の子は安息日の主であ

るといってますね。

A 光の子には2つあるが、人の子はキリス
トの事でしょう。

S son of man と children とはちがって
いるのでしょうか？

司会 この人の子はひととびとという意味で
はないかな。

O いや人の子はキリストですよ。

X 主ということばと救い主というように、
人の子というのあいまいさはないとおも
います。

F 人の子というのは安息日をつくった主で

あるとかがえた方がいいですね。

Y ダニエル書の中にも人の子というのがでてきますけど、神の子という意味の人の子でいいと思います。

O ここでキリスト自身に限定しなくてもいいみたいですね。人の子を人間と考えて人間のために安息日が作られたとするとすべつてものは人のためにつくられたという聖句に通じますがね。

S 人の子というのはエゼキエルなどのなかには人間という意味もありますよ。
司会 結局両方かんがえられますね。

(編集子註。ここに言っている人の子(Son of Man)とはイエス・キリストのことキリストの父は聖なる人「Holy Man」であるからです。「高価なる真珠」モーセの書六〇五十七には「アダムの言葉にて『聖なる人』とは神の御名なり。神の生みたまう独子の名は『人の子』なり。こはすなわちイエス・キリスト、義しき判士にして『時の絶頂』に来るべし」と言っておりす。すなわちイエス・キリストは「聖なる人の子」短かく言えば「人の子」であります。従って、イエスが弟子たちに「人々は人の子をだれと言っているのか」とたずねら

れたときの言外の意味は「人々はわたしすなわち神の子をだれと言っているか」というのであった。シモン・ペテロがこれを悟って「あなたこそ生ける神の子キリストです」とこたえたので、イエスは「あなたはさいわいである」と祝福のことばをお与えになったのです。旧約聖書に百箇所ほどある「人の子」は人間の意味ですが、これを新約聖書の中に七十箇所ほどある「人の子」(Son of Man)に適用するのは誤りです

(「モルモンの教義」(英文)六七頁参照)。
司会 さて八福の教えに入りましょうか。
まず貧しいひとたちという疑問がでてきま

すね。

T いつも不満をもっているひとたち、けんそんなひとたち。

Y 素朴なひとたち。

N 生活が貧しくて人と人との関係のうまくゆかないひとたち。

H これは経済的にこまっているひとたち、心の貧しいとマタイはかいているけどルカは単に貧しいとかいているのだから。

O するとお金持はけんそんではないのですか？

A ここに場面に来ている人は貧しいひとが

実際きているわけです。この人たちを実際にはげましていることばだと思うのです。その貧しいという意味のうちに上げられたと思うのですが。

O ここでは弟子たちについているのでしょう？ エンサイン・ローレルのテーマのレッスンにでているし。

A マタイのつたえた山上の垂訓と場面がちがうし、またこのときにはまわりに伝道団もいたし、群衆も当然いたのだから、当然その人たちにも話したことになると思われ

るけど。
Y ルカ伝の17節にイエスは山を下って平地にたたれているとかいてあって、マタイの山の上で話されたというのとくいちがっていますけどそれを考えてみませんか？

A ここではルカのつたえた場面とマタイの伝えた場面はちがっていると思うのです。イエスがおなじ教えをくりかえされたこともあったらうし、八福のおしえの中味もちがうのですから。

Y・Y マタイ伝四章をみると群衆のきた地方がちがうところとして書いてありますね。

Y ルカは小アジアの人でしかもキリストに

従って歩きまわった人ではないのだから、伝聞によってかいたので細かい点にまちがいを生じたという説もありますが。

A しかし現在の研究ではルカは歴史をめんみつにしらべていて、キリストのおられたころ生きていてA・D 60年〜90年ごろに書いたという意見が多くあるからここでは別だと思わんですが。

D 山上の垂訓のいつている内容がおなじであってマタイ伝の方を我々は山上の垂訓といっているわけだから、これが別でも構わないでしょう。しかし十二使徒を選んだ時間的なズレもありますね。

K 山上といっても映画でみたりすると平地より少し高いというだけだから山上でも平地でも同じであるし、平地にたれたとあって山の中腹の平らな点かもしれないし、同じようにカペナウムに帰って来ているんですからちがわないのではないかな。

M しかしカペナウムにはイエスの家があったのだからいざれ帰るのですが。

司会 それではもう一度内容に入りましょうか。

A だからここでルカの伝えた場合ではイエスが実際に生活に困っている貧しい人と考

えて、とくに心の貧しいと限定しなくてもいいと思います。そしてその生活の問題以上に神を求めて集まって来ている人たちを表わしているのではないのでしょうか。

(編集子註。マタイ五〇一には「イエスはこの群集を見て、山に登り、座につかれる」としてあり、ルカ六〇七には「イエスは彼らと一しょに山を下って平地に立たれた」としてあります。これについてタルマジ長老は「基督イエス」の中で「イエスは山の中腹に於いてその場に居た弟子たちにくわしく教えを説かれ、またその弟子たちの中から前もって十二人を使徒としてお選びになったが、それが終ると彼らと一しょに山を下って群集の居る平かな所へ行かれ、そこで前に説かれた説教の一部を彼らに語って聞かせたもうたと考えられるではないか」と言っておられます(「基督イエス」(英文)二四七頁参照)。「平地」(ルカ六〇七、口語聖書)、「平かなる処」(ルカ六〇七、文語体聖書)は、モフェット博士の私訳聖書の中では「平かな地点」という意味の言葉で表わされています)。

司会 この飢えているひとたちというのも義に飢えているとは書いてありませんね。

O しかし飽きたりるものをかながえるとそれは天の宝であってこの世のものではないでしょう。

H この飢えるというのは貧しい状態でなくて欲しいという気持をもっているひとという意味でしょう。

E この時代にどのひとが富んでどのひとが貧しいかということを時代的にかんがえる必要もあるね。

A この満足するは、やはり現実的に満足という意味でイエスの教えは現実の人たちの生活と遊離しているものではないと思うのです。

(編集子註。旧新約聖書全六十六巻はブリリアント型に仕上げられたダイヤモンドにくらべられる。そのダイヤモンドの一つ一つの面はみなそれぞれがった方を向いており、ちがった方向へ光を反射しているがこれを全体としてながめるときは光り輝やくみごとなダイヤモンドである。これと同じように旧新約六十六巻の一つ一つは、それぞれがった個性をもつて福音を説いており、その言い表わし方こそちがっているが、全体として見ればみごとな福音の集大成である。それであるから「ちがっている」

ことと「相反している」ことは区別されなければなりません。「ルカによる福音書」の前には、ルカ自身が「一〇—一四にはつきりと言っているように「多くの人が手をつけた」文献があった。ルカはこれを「順序正しく書きつづつて」後世に伝えたのであって、現在私たちが見る「ルカによる福音書」が最も古い原本ではありません。またルカの方がマタイよりも古くてくわしいからといってそれが「より完全である」ということにはなりません。聖書の一巻一巻には個性があり、それが集まり合つて福音を大成しているからであります。

司会 次の泣いている人たちというのは。

Q 感激して泣いている人たち。

K 神の国を知らなくて現実になくて現実泣いている人たちは悲しみを取られてわらうようになるのでしょうか？

A ここでは群衆を対象にして息子の死やなにかでないでいる人たちがキリストをしたつてくるのをはげましておられるのでしよう。

H 罪があつて泣いているひとたち。

Y エレミヤのように泣いているひと。

G やはりここはマタイ伝の悲しむという意

味だと思ふ。

A いくら神をみとめてもどうしようもないとなげいているひとたち。

J この聖句もやはり現実の問題にてらしてやる事が大切ですね。

D ルカ伝は表面的なことばかり書いているのでなく、まずしい中には心のまずしい人もあるし、ひろく一般的に解釈するのも必要だと思ひますけど。

バプテスマ

道三 岡田 普天間 知念 金城 宮城 王城 那覇 森駒 東思納 金城 大城 田畑 正堅 古仲 田康 保子

執事

岩井 永一(阿倍野) 住吉 正博(東京中) 辻 正春(群馬) 白石 誠(東京中) 浜田 哲(群馬) 尾古 義和(東京北) 小林 広(岡町) 刀称 雅一(〃) 佐々木雅啓(小樽) 戸川 健一(東京中) 高山 秀二(〃) 大原 光長(〃) 高縄 健一(東京中) 大橋 正弘(東京北) 織本 信之(〃) タグチミツヤス(柳井)

教師

小倉 国康(阿倍野) 泉谷 巖(〃) 清水 武史(〃) 田原 慶三(〃) 谷 義則(〃) 鷺 進二(阿倍野) 伊藤 悟(旭川) 木崎 正巳(〃) 相川タツオ(群馬) 酒井 肇(東京北) フクイヒサシ(横浜) 祭司 新城タケシ(群馬)

聖夜

永きにまちたる 救い主
こよい この世に現れり
東に輝く あの星が
我らに喜び 告げたもう
神のみ業は 奇しくくすくて
尊き御名を讃美せん



鈴木百合子

詩

迷える羊を かきいだし
深き愛をば 注ぎつつ
真理まことの道を歩まんと
御子みこをこの世に使わしたもう
聖なる この夜のできごとを
もろびと語りつたららん

勤 勞 奉 仕 宣 教 師 に 召 命 せ ら れ て



写真は建築委員会事務所

奈良 富士 哉

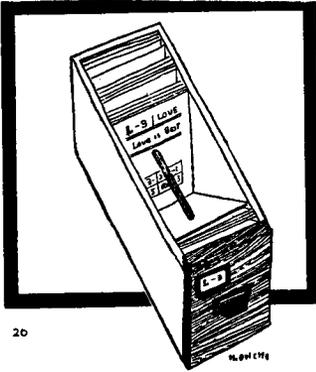
私は本年三月勤めを停年退職して藤沢市片瀬の畑の中に住んでおりました。色々の事情で余り教会にも出席出来ませんでしたところへ十月七日午後アンダーセン伝道部長始め清水長老、田中横浜支部長外宣教師の来訪を受けました。突然のことなのでびっくり致しましたことは七月十九日によるアンドラス前伝道部長御帰国見送りに羽田に行きましたときアンダーセン新伝道部長にお逢いしたのみで教会本部にも参りませんでしたから何事が起ったのかと思いましたがあのじょう大きな問題を持って来られるのです。皆様も既に御存知のように「聖霊の道」五月号に末日聖徒イエス・キリスト教会北部極東伝道部地域に教会堂建築委員会が設置され七月頃建築委員の方々が来日されることをお読みになったことと存じます。ところで最早中央地方部東京地区に教会堂建築委員会が発足し既に勤勞奉仕宣教師が召され待機して居りその兄弟等の監督指導、食事其の他のお世話するように私共二人に白羽の矢が立たれたからです。私共は静岡県の地に勤務し四年間というもの教会に遠ざかっておりましたが総ては神のみ心と在じますのでこの重大で且つ責任の多い大きな奉仕のお仕事を喜んでお引受け致しまし

た。一九〇一月本教会の伝道部が日本に開かれてから六二年間（其の内二十四年ばかり空白でしたが）一九六二年に初めて教会室の建築事業が始められたのですから容易なことではないと云うことはよく承知しておりますしかしお召しにあづかりお引受けした以上主の御力を得て献身的にこれが目的にこれが目的達成に最善の努力をすることこそ当然であり又最大の感激であります。

十一月六日の夜、アンダーセン伝道部長、吉野第一副伝道部長、ヘルズ建築委員会委員長、カラマ長老の出席にて左の兄弟姉妹が勤勞奉仕宣教師に按手聖任されました。

奈良富士哉、奈良源子、石川善次郎(西)、松島烈俣(西)、チャールズ田畑(南)、工藤駿(北)、大橋正弘(北)、小泉裕功(横浜)この大きな仕事の為めには多くの兄弟姉妹が左の御支援を心からお願い致します。(一一・七記)

系図の道しるべ



20

初心者のために—謄本と抄本—

それ死にたる者の救いは必要にして、死にたる者の救わるゝことはわれらの救にとりて必須なることなり、教義と聖約百二十八章。

死者の探求は最も大切な任務の一つです。

こゝでは実際の系図の探し方について学びましょう。まず必要な記入用紙を支部系図委員又は伝道部よりお求めになり、わかるところを記入します。その際、記入要綱の正確さを補い、空白の欄をうめるために、謄本を用いると良いです。謄本には戸籍謄本と除籍謄本があり、その一部分を抄本といいます。

戸籍謄本……戸籍の記載全部

戸籍抄本……戸籍謄本の一部

除籍謄本……戸籍の全部が除籍されてあるもの記載全部

除籍抄本……除籍謄本中の一部

左記の写しを入手するためには二つの方法があり、一つは閲覧であり、もう一つは謄本の復写をもらう方法です。閲覧するには本籍地の役場に出むいて行きます。(場所により異なり町村は役場、大都市は区役所、市は市役所 同、支所又は出張所等があります。) 謄本・抄本の取寄せは郵便によっても出来ません。

謄本取寄せの例文

拝啓御多忙のところ誠に恐縮ですが、左記の件につきましてよろしくお願い申し上げます。

本籍地……………

戸籍筆題者……………

の戸籍謄本を一通取寄せたく、切手にて三百円を同封致しましたから、よろしくお願い申し上げます。

昭和三十七年十二月十日

小笠原 花子

〇〇〇役場戸籍係

謄本は一枚、すなわち二ページで四拾円(役所によって八拾円)です。場所によってキッテを使用しないでキャッシュの所があります。キッテ封入枚数は多めに同封すれば余りは返送してきます。謄本一枚の記載人数は三人〜六人ぐらいです。現在の謄本一枚の記載人数は四人ですが、一と昔は六人が多く、戸籍筆頭者は戸主と言われていました。

委員の手引き

組織の充実とホーム・テイーチング

完成シートの九〇パーセントが系図委員の手による作成であり、しなければならぬ立場すなわち、まず自分の家系を調べよう、という状態にあつて探求を行ったようです。各支部に系図熱が高まり会員が、探求しよう、という熱意を持つためには、まず完全な組

織すなわち空職のない組織の状態を保たなければなりません。支部によっては人手不足の支部があると思いますが、そのような場合に他職と兼ねても良いと思います。委員は定期的な活動目を定めてシートの記入法を学び、よく折り、ホーム・ティーチングを強力に推進するようにお願いします。ホーム・ティーチングは一番着実な方法であり、当伝道部における成果も非常に大きいです。ホーム・ティーチングの仕方は日本系図探求要覧をご覧ください。

バプテスマと面接

会長又は副会長は新しくバプテスマを受けた人々、受ける人々と面接を行う。面接の目的は系図の重要性和認識を深めるところにあります。その際、個人の記録用紙（出来ればその他のシートも）を手渡し記入方法を説明してあげてください。心新たな彼等に死者のバプテスマについてお話してください。まだ教会を良く知らない主の子羊を心から暖かく迎え親しい兄弟姉妹になってあげてください。系図委員は良い人達ばかりだと恐れられ支部の光であらんことを。

シートの備えと販売

系図委員は支部に系図シートを常に備えて置く必要があります。支部に手持ちのシートがない場合は支部長会に依頼して伝道部より購入して下さい。個人の記録、家族の記録、

系図、肖像入りの系図、家族史誌等すべて一枚 日本文は三円、英文は五円です。委員は一・二ヶ月に一度必ずシートを販売してください。販売の目的は会員が自己のシートを所有する事と系図に対する確識のPRです。シートは必要枚数と販売上らかな値段に組んで目だつところで机に並べて売るとよいです。今月より各支部の系図委員主催の、系図の集いが毎月一回行われるようになります。プロگرامの内容と方法は聖徒の道を通じて御連絡致します。プロگرام及び期日は支部の都合により変更しても良いですが、出来れば定められた内容で定められた日に行うようにしてください。

十二月十六日(日)師走の夕べ

◎プロگرامの内容

- 一、開会の行事
- 二、歌(皆んなで) 歌集より二・三曲
- 三、お話し大陰暦と大陽暦
- 四、系図の作業
- (イ) 初歩の人―贈本取寄せの手紙文
- (ロ) 探求途上の人―個人の記録の完成
- 五、歌(皆んなで) 歌集より二曲
- 六、閉会の行事

(注) 四の(イ)はびんせん、茶封筒を支部で用意して下さい。(ロ)は支部長会の助力により支部の記録より正確な記録の探求を行ってください。

例えばバプテスマ生日、日曜学校第一副会長に聖任された日、その聖任。神権授与と職の昇進日、バプテスマを施した人と日付。又

この会を豊かにするために、リフレッシュメントの用意があればなお良いと思います。同会の中に変わった自己紹介を入れたり、又、聖典よりクイズを作ったりしてプロگرامを工夫して下さい。

◎プロگرامの準備

○責任の分担

司会、指揮、話、飲食、歓迎、準備、PR

○祈禱会

聖句朗読(心静まを聖句、又は靈的な話)

プロگرامの内容と準備の再確認

集会の注意事項

祈禱者

責任者はプロگرامに責任ある人達が必ず祈禱に出席するように促してください。

大陽暦と大陰暦

大陽暦は今、われわれが使っている暦で太陽の運行を観察してつくったものだが昔は大陰暦をつかっていた。そくに旧暦というのがこれだ月の満ちかけを基準にしてつくっている。だから太陽暦と大陰暦とはおのずからくいちがってくる。世界にはこのほかに天体暦、回教暦、インド暦、中国暦、ローマ暦、ロシア暦などいろいろな暦がある。

太陽暦は四千年も昔、エジプトで創られ西暦紀元前ジュリアスシーザーが改良して一五八二年にローマ法王グレゴリー三世が現在のものに改めた。太陽暦をはじめて日本で採用したのは明治五年(一八七二)で、一二月三日を明治元年一日としたがはじめは非常に反対があった。

発表

昭和三十八年度の子供の日曜学校教科書は次の通りです。今年から実施されましたように、この学校だけ四月をもって新教科書となります。どうぞお間違いのないようお願い申し上げます。各支部とも、それぞれの理由がございましょうが、出来るだけこれらの計画にそつよう準備されることをのぞみます。

- 上級 モルモン経物語
- 中級 宗教と生活(1)
- 下級 旧約聖書物語

以上

次に三十七年度を振りかえつて、何月号には、どんなことが載ったか、参考までにまとめました。

月号	ページ	内 容
1	28	ルツヒボテスの物語
2	96	新しい土地でのお友達 (物語)
4	236	イエスのたとえばなし一覽表
5	285	詩は子供たちの言葉である
6	363	スーザンはボーンで平原を旅しました (物語)
7	423	詩 (お留守番・ラウガキ)
8	484	音楽指揮者の貴女へ
9	552	切紙ざいく
10	612	出席表をつくりましょう
11	678	クリスマス・カードをつくりましょう

イエスとニコデモ (黒板物語)

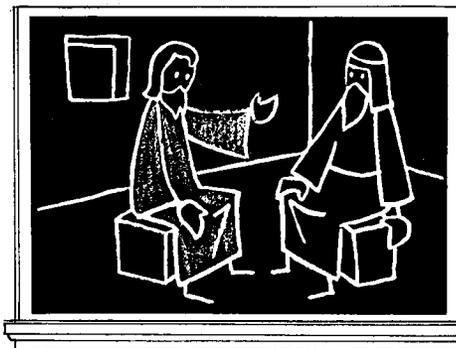
久しぶりで黒板を利用しての物語を取りあげてみました。

方法

- 1 小黒板を二つ使用
- 2 大黒板を二つに分けて使用
- 3 1・2とも絵を先にかけておく (薄く或は濃く)
- 4 絵の上手な先生は話しながらでも、かいてみる。(練習が必要)
- 5 二人の先生で物語を進行させる。そのうち一人が絵を専門にかく。その他、研究してみてください。

物語

イエスがパレスチナ地方を旅しておりました時に、多くの人々は彼の下に集り心からイエスを讚美しました。その人々の中には、とても、貧しい生活をしている人がおりましたが、大変謙遜な人達でした。他の人達は高慢で富んだくらしをしていました。そしてイエスを認めておりません。イエスを讚美する人々の中にユダヤ人の指導者であるニコデモという人がいました。ニコデモは、イエスは神から使わされた偉大な教師であると知っていましたが、おそらくそれ以上の方であることを彼は知りませんでした。何故なら、イエスを天在なる神のひとり子であり、地球上の人々に最高の生きる道を数えにこられた方であるということ。或る晩、ニコデモはイエスと二人だけで、誰



にも邪魔されず、お話がしたかったので、イエスのもとを訪問しました。ニコデモはイエスと一緒に腰をかけ静かに語り始めました。「先生、私はあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません。」

確かに、ニコデモは、救い主のする様に病人を療したり、たくさんの奇せきを行う、イエスに強ひかれました。イエスの教え、生き方に特にニコデモはひかれたのでしよう。イエスは答えていわれました。

「よくよく、あなたに言っておく、だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。」

イエスのいわんとしたことに、天国にはいるためには、全ての人が浸礼によるバプテスマを受けなければならぬ。すなわち、水の中に全身を完全にしずめ、再び水からあがることであります。

ニコデモは、救い主の言葉を良く理解できず考えていました。

「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生れることができましようか。」

イエスはこの質問に答えられました。

「よくよくあなたに言っておく。だれも水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」

イエスは再び語り始めました。

「わたしが地上のことを語っているのに、あ

なたがたが信じないならば天上のことを語った場合、どうしてそれを信じるだろうか。」

また次の様におっしゃいました。「神はそのひとり子を賜わったほどに、愛してくださった。それは御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の生命を得るためである。」

私達はイエスがニコデモに忠告したことを、ニコデモがそれに従ったかどうかを語るのではありません。私達はニコデモが常にイエスを讚美していることを知っていますものネ

(シーン I)

イエスの死後、ユダヤ人はばかかって、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願いました。ピラトはそれを許しましたので、死体は取りおろされ墓の中に収められました。

ニコデモは没薬と沈香とをまぜた物をイエスの身体に注ぎました。(シーン II)

○どのようにして活動を進めるか

シーン I—黒板に質素な室内をかく。

イエスとニコデモが顔を合わせて腰をかけている。

活動 —ニコデモがイエスのいわんとしていることをたづねている。

イエスは天国にはいるには何を必要とするか、また他の教義を教える。

注意

絵の中で白くそめた衣をつけている方がイエスです。

参考聖句として、ヨハネによる福音書、第三章をお読み下さい。

活動

—ニコデモとヨセフはイエスの身体の埋葬の準備をする。

シーン II—山側の墓が開いている。死体となった、イエスの身体をかく。イエスの面脇にニコデモとアリマタヤのヨセフが、かかっている。

一月練習の歌 一四八番

教会音楽は、私たちの心を清め、礼拝の準備へとみちぎきます。聖歌隊の合唱をとおりまた会員のうたう讚美歌をとおり、ひとびとにキリストの福音を伝え、また自らも真理を学ぶことができるのです。

来年もまた心を合せて讚美の歌と一緒に練習しましょう。

一月の練習の歌は、一四八番です。

喜びの気持で、いきいきと歌ってください。楽譜上で注意する点は、各パートとも半音を正しくとること、音符の長さに気をつけていただきたい。

♩100と早いテンポですから、指揮者はゆっくりにならないよう注意してください。

二月練習の歌 一八五番

子供日曜学校 七番

子供日曜学校の歌の本は曲が少ないので先生方も苦勞なさると思います。同じ歌をくり返し練習しているので、前にならった方にはつまらなく思えるでしょうが、知ってる歌も気をつけてみると、案外まちがえて歌って

る場合がありますから、復習の意味で、ていねいに練習して下さい。

この歌は六拍子です。前に六拍子は二拍子と同じに振る様に申しあげましたが、いろいろ混乱がある(歌う例がなれないため)らしいので六拍子で指揮してください。

元氣よく楽しそうに歌ってくださいます様に。

指揮をなさる方に

練習の歌の時間に皆様はどの様に教えていらっしゃるのでしょうか。

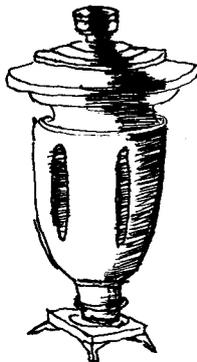
歌の練習のために、礼拝のふんいきがかわれる様な、練習方法をなさない様にお願ひします。

今まで、各パートについても説明してきましたが、これは礼拝の時間に四部合唱の練習をする意味ではありませんから、今迄合唱団形式で練習していた(日曜学校で)指揮者はこの点注意して下さい。私たちの集会のなかに音楽の占める時間はおおいです。それだけに指揮者の責任は重大です。

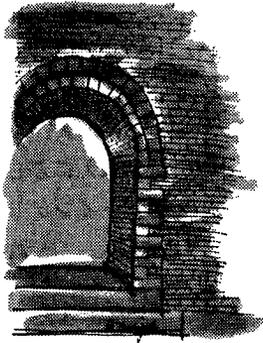
その集会に歌われる讚美歌には、予めよく目を通して、それから指揮壇に上って下さい。来月から指揮について、少しずつ説明しま

しょう。

あなたの支部で、いままで習った讚美歌で歌い方のわからない歌、又は指揮の点で問題がある時はどうぞ知らせてください。この本をとおりして皆で勉強しましょう。



歌 美 讚 の 練 習



日曜学校基金について

—— 支部長会、会長会へ ——

九月十六日は「日曜学校基金募集の日曜日」として行った貴支部の協力を深く感謝致します。現在まで幾回と行われたこの献金は全支部合計して相当の額になりました。十一月までの収入支出の詳細は今調査中で来月の聖徒の道に載せません。

今までは余りこれらのお金を十分に活用しておりませんが、伝道部の日曜学校会長会も組織され、いろいろと計画も練ることができましたので、来年はこれらのお金を使って精一杯活動致したいと思えます。来年度（一月から十二月まで）は次のようなことに重点を置きます。

- 1 伝道部日曜学校図書の充実（二万円）
現在こちらには殆んど本がないので翻訳をするとき、あるいはいろいろな資料を作るのに困ることが度々です。さしあたりは日本語に翻訳されたすべての本、アメリカで用いられているすべての教科書、教師への指導書（教科書について）などで、必要な場合には皆様にお貸し致します。（総目録は後で発表）
- 2 視聴覚教材用（二万円）
フランネルボードに用いられるもの十種類ほど、教会の歴史、大管長、イエス様などの大判の絵、三五ミリのスライド三種類、その他十六ミリの映画などを購入して全支部に回らん致します。

3 旅費（三万円）

地方部大会などで日曜学校指導者に伝道部の方針及び具体的な指示をするのに必要な伝道部指導者の旅費

4 日曜学校ノート負担金（二万四千円）

先月号のこの欄でも書きましたが来年の日曜学校ノートの赤字負担分です。

5 雑費（二万円）

種々の雑誌、翻訳に必要な経費、原稿用紙、通信費など。

尚最後には、新潟支部の五十嵐兄弟から聞いたことですが、支部長より「伝道部より通達が出来ないから集めなくてもよい」と言われて五十円献金は実施しなかったとのこと。伝道部長より特に話がなくてもこれは毎年行われるべきのもので、こと日曜学校に関してはこの日曜学校ガイドの欄を通して伝道部の指導者より伝達されることになっております。いろいろな事情でこの献金をしなかった支部は来年一月十三日にこれを実施して下さい。

テキスト・ノートの注文について

先月号でテキスト・ノートの見本を十一月中葉頃まで各支部に送ると書きましたが出版の遅れのため十二月の初めになりました。多分これをごらんになっておるときにはついておると思います。注文も十日延期して二十日まで本部へ注文して頂ければ今年中に各支部に着くよう速達でお送りします。会員、求道者すべてがテキスト・ノートをもつよう心から希望しております。

計 画

ジェンス
滅の肉体
76:64, 65
88:96-98
27:52, 53
ファイ 9:8-12
5:28, 29
録 20:4-6
29:26
15:51
63:50, 51

6

最後の裁き

教義と聖約 38:5

第2ニーファイ 9:15

ヨハネ黙示録 20:12, 13

7a

日の栄えにふさわしい体
+霊+インテリジェンス
教義と聖約 76:70
〃 88:28, 29
第1コリント 15:35, 39-42

7b

月の栄えにふさわしい体
+霊+インテリジェンス
教義と聖約 76:78
〃 88:30
第1コリント 15:35, 41, 42

7c

星の栄えにふさわしい体
+霊+インテリジェンス
教義と聖約 76:78
〃 88:31
第1コリント 15:35, 41, 42

7d

亡びの子
アルマ書 12:12-18
第2ニーファイ 9:16
教義と聖約 88:32-35
ヨハネ黙示録 20:5, 6, 14, 15

サタンに従った霊たち

救いの道

②

インテリジェンス + 霊

伝道の書 12:7
ヨブ記 38:4-7
エレミヤ記 1:4, 5
ヘブル書 12:9
教義と聖約 93:33, 38
モーゼの書 3:5
アブラハム書 3:22, 23
〃 3:26-28

①

インテリジェンス

教義と聖約 93:29
アブラハム書 3:22, 23

霊の
誕生

肉体の誕生

ヴェイル

③

インテリジェンス + 霊 + 死すべき肉体

創世記 3:2-7
〃 3:16-19
アルマ書 42:9, 14, 15
アブラハム書 3:24, 25
教義と聖約 29:34-45
アルマ書 12:24
〃 34:35
ヒラマン書 14:16

死を味わわない人々

復活

⑤

インテリ + 霊 + 不

教義と聖約
〃
マタイ伝
第2ニーフ
ヨハネ伝
ヨハネ黙示
教義と聖約第
1コリント
教義と聖約

④

インテリジェンス + 霊

ルカ伝 23:42, 43
〃 24:36-39
第1ペテロ 3:18-20
第2ニーファイ 9:12, 13
アルマ書 40:11-14
教義と聖約 45:17

肉体の死



MIA

リーダー

《お知らせ》

一、最近、各支部の宣教師達の唱導で各MIA毎にバスケットボールのチーム(その他のスポーツを含む)が組織されつつあり、伝道部MIA管理会長からの指示がないのにMIA会員を動員する事は秩序の点で納得し難いと云う質問が多数参って居りますので、改めて御説明申し上げます。そもその発端は現伝道部長が此の教会の発展の一助としてスポーツを選び、宣教師を通して各支部に普及するよう指示したのであるが、事後、私達と話し合い、次の諸点を再確認しましたので各支部の皆様にも遵守して下さいますようお願い致します。

(A)全てのスポーツ、レクリエーションはMIAの組織を通じて行ない、今回の場合でもMIAの会長と管理宣教師の話し合いで行なう。責任者はMIAの会長会にあり、予め支部長会の承認を得ておく。(スポーツ・リーダーが実行責任者となる)。

(B)各MIAの活動方針は伝道部MIAで発行するマニュアル(「聖徒の道」MIAリーダーに従って行ない、特別の活動は支部内では支部MIA、地方部内では地方部内MIAの各会長会の責任下で行ない、予算もそれに応じて支出される)。

二、今度、伝道部MIAと地方部MIAが分離されたのを機会に伝道部MIAを拡充いたしますので英語に特に堪能な方を伝道部MIAの翻訳委員として御協力して頂く予定であります。

りますから「お手伝い」出来る方が居りますら
たら当方へ御連絡下さい。

三、十二月号「聖徒の道」が皆様のお手許に届く頃には「素晴らしき考え」のテキストが出来上って居ると思えますが、一応十二月の分の七、八課を載せておきました。皆様にお迷惑をお掛け致しまして誠に申し訳御座居ませんでした。尚一部の定価は百五十円で、本部へ直接申し込んで下さい。(裏二記)

一月三日 一般活動「新年会」

一九六三年を迎え、MIAの皆様といっしょに「新年会」を開きましょう。此の日のプログラムの中には、日本古来の遊びを大いに入れて企画しましょう。まず、招待状をかねて、年賀状を各兄弟・姉妹やお友達に送り、多くの人が愉しい「新年会」に集うよう計画してはどうでしょうか。十二月の最終木曜日のMIAは休暇になりますので、クリスマス・パーティの時や日曜学校の時にボスターをはって出て来る人が、会場のことを知ることは出来るよう、会のあつことを知る。

此の日の責任はMIA会長会にあります。提案されるプログラムは次の様なものです。各支部に於いて条件が異なりますので独自のプログラムを計画してさしつかえありません。

提案プログラム

- (一) 羽根つき大会、凧あげ大会、餅つき会、カルタ、百人一首大会等。
- (二) ゲームとダンス・パーティ

(白) スキー、スケート、パーティ
(四) 十八番大会(個人やグループにより)
(四) お雑煮とおしるこ食べよう会
(四) (ゲームや(一)、(四)を含むと良い)

これ等のプログラムの他にまだまだ良いもの、面白い事が沢山あると思います。大いに新年の抱負を語り合う会も有意義なことでしよう。(四)を行なう場合は個人の十八番や、グループによる催物等をあらかじめ、お願いしておいて準備しておく、会がスムーズに行くと良いでしょう。また、いくら余分な時間をとっておいでとびいりも歓迎したら面白いでしょうね。

各支部に於いて、きつと愉しい新年会を持つことが出来るでしょう。M I A 会長会の方々の腕を期待して居ります。(米子記)

一月十七日、一月二十四日「ローレル」

クラスの計画其の一、其の二

ローレルのクラスに於いては何か、有意義なことを計画立てます。例えば、貧しい人々に賜る為の衣類の作製や修理、更製、または孤児院を訪問する為の準備品を作製したり、集めたり、或いは、支部内で困っている人のために、食料を集めたり、衣類を作ったり、其の他、色々な計画を立てることが出来るでしょう。それを此の二つの夜に行うわけです。前の月に、ローレルのクラスに於いて、此の夜の為に、目標を立てておくはずで、それによって、此の二つの夜に心からのローレル達の愛のこもった仕事ができるわけです。

あらかじめ準備しておいて、第一夜の時(十七日)に皆で仕事をし、第二夜に訪問先に持って、良いでしょう。

ローレル達がやがる、扶助協会に於いて愛と信仰のお仕事をする為の準備として計画立てられております。ローレル・クラス・リーダーは良く管理、指導して下さい。(米子記)

旧訳聖書からの素晴しき考え

第七課 責 任

成熟さは身体の大きさ、年令とはあまり関係がない様に見える。ある人は「子供らしさ」を失う事なく年令と共に順調に育っていくし、亦ある若者や婦人は肉体の成長で各段階毎に発育の特徴を表わしている。人間の成熟さは我々をとりまく自然界に見られる成熟の過程とは異なる。花から最後に見られる成熟なる林檎は単に表面的には人間の成熟と似ているが、それは単に物質的な焦点を置く場合に云えるのである。人間の成熟は根本的には精神的なものである。子供が洗礼を受けて教会へ入る時、彼は責任の洗礼を受けた事になるのである、責任度の高い段階を上っているのはそれ自身がその成熟さの進歩を表わしているのである。然し乍ら、この責任度に関する成熟さと云うのは何も現代では無い。昔の聖典の中にもしばしば取り上げられていた問題である。モルモン経典の最初の章に記録されている若きニーファイの成長ぶりが生き生きとした肯定的な描写で示されて居

る。「私、ニーファイは幼い頃から背が大き」とか「私、ニーファイは大人になつて」とか書かれてあり、多く試みられ、いつもそれに打ち勝っている。彼は版を得る責任を受け、次第に大切な義務を負わされていった。一方イスラエルの歴史はそういつも肯定的ではない。旧訳聖書には多くの不従順な例があり、それ等は無慈悲に扱われている。未来の世代の人達が必要のない墮落の中で罪や謀叛にあつた事によって良い例になると云う考えに關し、旧訳聖書は非常に能力のある人達が精神的に伸びようとしたその責任の評価に何度も失敗していると繰り返して述べている。これ等のうちで最も記憶に残るものは出エジプト記32章である。モーゼがアロンを残して山へ上っている間、アロンは彼等民衆から彼等を導き出して呉れた「神」を作るよう要求され、屈服して一つの像を裝飾用の金を鑄す事によって作つた。此処に彼の最初の不従順さが始まり、次へと進んでいくのである。モーゼに対する教訓の終りに主はイスラエルの人々が自から破壊の道を進み、主も彼等も滅ぼさんと告げている。モーゼは彼等の為に請願し、次の機会になるよう主を説得したのである。モーゼは神の戒めが書かれてある板を携えて宮へ戻つて来たもの(彼の等の振舞に激昂し、彼等の視ていた前それを砕いてしまつた。モーゼは兄弟のアロンを呼び出し非難を明らかにしている。「此の民汝に何をなしてか汝かれらに大いなる罪を犯せしや」(32章21節)アロンは彼等が「悪なる民」である事

を知っていると答えた。然しこれはモーゼの質問に対する答えではなく、アロンは責任を転嫁しようとしたのであった。

彼等われに云いけらぬ我らを導く神を我等の為に作れ。そは我等をエジプトの國より導き上りしかのモーゼ其の人は如何になりしか知らざればなりと。(32章23節)

彼は更に彼等に云った。

是において我全て金を持つ者はそれを取り外せと彼等に云いければ則ちそれを我に与えたり。我これを火に投げたれば、此の憤出されたり。(同24節)

読者の皆さんがアロンの口車に載らないよう締めくくりを付けておこう。「エホバ即ち民を撃ち給えり。是は彼等憤を造りたるに因る。即ちアロンこれを造りしなり」(32章35節)若し我々が明らかにアロンが為すべき責任の回避に同感の念を抱かぬなら、悔い改めの説明を避えてその事にならぬまいか。

ジョン・ホームズ氏の「話」と云う感動的な詩の一節がある。これは一人の少年がある年老いた聾(つんぼ)の船の模型造りの家を訪れた時、責任の大切さを学んだ物語りである。曾って荒海に馳せ今は年老いて耳遠く物祝る力失せたりき

我が翁と語る時
我が心は喜びにうちふるう

ただ船造りに日々を費やし多く語らず
その少年は老人の信じられぬ程器用で苦節に耐え抜いた両手を見つみているうちに「良き職人氣質」が何であるかを学んだのである

然し、もっと大切なのは以前は知らなかった他の何かを学んだ事である。二人の間の会話は少なかつたが少年の耳にある閃めきが起つた。

……汝は造りし船を多く語らねども帆をはらみて海を走らん

若い人達は「はつきりと説明する」為にかンセラーや教師、雇い人の処へ出掛けていく。多分我々は仕事をされる際にも性分の分つた雰囲気を作り出そうと努力をする。他方、個人の責任は次の二つの方法で放棄されてしまふ。第一は福音の根本の原則に突き当ってしまひ、それはその人の信仰を弱めてしまふ。そして神への信仰を破壊してしまふ。(この世の全ての物が機械的な力で説明出来たら神は不要になつてしまふ)

第二はとるに足らないものであるが、人間の発展と成長に必要な責任を受けるのを拒否してしまふことである。悪事を働く自覚もなく行動に改革がないのである。この点をリリーハイが詳しく述べている。(第2ニーフアイ11章13節)。(アルマ書30章17節)参照

我々はどんな場合でも前進する時にはしっかりした足踏みで歩まねばならない。

我々が此の世に来る時の祝福は自由意志と正しく選ばれたと云う事である。我々の責任は持てる才能を伸ばす事である。「あなたの持つものはそれで充分である」と云う簡単な一句以上の忠告は何も与えられていないのである。神から与えられたものはそれだけで充分であり、それを大きくしなさい。若し問題の分

解決に向かう第一段階が問題の存在を確認する事であるなるなら、それは責任を自覚することでもある。教会も家庭も社会もすべてが源であり、アロンの雄弁は決してこの事実を変えられないのである。

討論の爲に

- 1 多数決投票で決められる物事では一人の責任はどう影響を及ぼすか。
- 2 物事の決定に際し環境はどんな役割りを演ずるか。
- 3 真理とは何であろうか。無益な討論でなくアロンの真理に就て考えてみよう。
- 4 どんな条件の下でお互いの責任を分かち合いますか。(幸福な結婚をした場合、亦逆の場合に就て考えてみよう)

第八課 便法

便利さの根本的な意味に就て考えてみよう。誰かが足を捉えられた場合、何か犠牲とが方法をめぐらす事なしに自由にする必要がある。迂遠さは心須ではあるが成功すると思われる行動は全て検討する筈である。その如何なる場合にも我々はゴルジウスの結び目を断ち切る問題を解決したアレキサンダー大王と同じ考えを持っている。あの卒直な行動を考へる時、疑念を懐くのは後回しである。そして次の得心の言葉「結果は手段が変える」を聞けば我々の立場がより確かなる。然し乍ら、今の名文句を持ち出す事実はとりも直

さず容易でないと云う告白でもある。長い間ある行動をした後でその意識を覆い隠す事は出来るが静め消し得ない。何か行動を起した能はそれが例えどんな行為であろうとも印象的に入る。だが大勢の人に対する訴えは大抵受け入れない。ここで静かな、小さな声に耳を傾けてみると、結び目を断ち切つて解いたものの繩は駄目になってしまった事である。

この便法的行動は一見どんな時にでも有効の様であるが、律法を無視した場合に成り立つのである。環境の力で惹き起こされる行為は、一時的な解決以外の何物でもない。我々は外部に及ぼす傲しを取り扱うのであってその原因は追求しない。

サムエル前、後書に述べられているダビデの浮沈の物語は律法に従わない時、非物質的力がどんなであるかが浮彫りにされている。彼の偉大な信仰、主に對する敬虔さ、友情の深さ、従民の忠誠を鼓舞する能力、更に明白な事として雑多な民を統一し、鞭うった卓越せる行政上の手腕―是等は孰れも至上的指導力を想わせている。ダビデは死ぬ迄か上の如き指導者ではあったが絶望の王でもあった。彼はバテシエバを取り、ウリヤを殺した罪を認めていたが彼の最初の墮落は肉欲からではない。彼は姦淫で罪とされるずっと以前から「便法」を使つていて罪を犯していたのである。若し便法を必要とする様な道德の罪で汚されなければダビデはそうやすやすと墮落の通を踏まなかつたであろう。この瞬間からダビデは妹のゼリヤの息子達のヨアブ、アビシ

ヤイ、アサヘルを彼の没落の種子を時く部下に選んだのである。何故なら彼等は冷淡で、愚直で、残酷であつたからだ。彼等は効果的に、容赦なく物事を行ない、若きダビデは王になる迄彼等を利用したのである。これはサウルの子孫達から強い反対を受けたもの、ダビデの甥、特にヨアブに對する信頼は想像し得ないものであつた。然しヨアブが戦いでアビネルによつて殺されたアサヘルに報いる冷血な復讐でアビネルを殺した時ダビデは大いに驚いた。だがゼリヤの息子達は自分の地位が確固となる迄必要とされていた。ヨアブはダビデの如く想像力の豊かな指導者ではなかつたが、司令官としての効役は頑固と、冷酷さにあつた。多くの臣民を打ち殺したり、アブサロムの謀叛の時にもダビデの願ひにも拘らずアブサロムを苦しめ、殺してしまつた(サムエル後書18章5節)彼は既にダビデの權威を無視し、王は命令を与えるだけに過ぎなかつたのである。

されど今立ち出で、汝の諸僕を慰めて語るべし。我エホバを指て誓う汝、若し出でずば今夜一人も汝と共に留まる者なかるべし。是は汝が若き時より今に至る迄に蒙りたる諸々の災禍よりも汝に悪しかるべし。(サムエル後書19章7節)

ダビデはヨアブを軍の長官に転任させようとしたが彼は機会を待つて後任のアマサを殺してしまつた。ダビデはシメイをどうするかを決める際に憐みの気持ちを表わしている。ヨアブの兄弟のアビシヤイはシメイは殺され

るべきであると提案した時次の様に云われた。ダビデ云いけるは汝らゼリヤの子よ、汝のあずかる所に非ず。汝等今日我に敵となる。今日あにイスラエルの中にて人を殺すべけんや。我あにわが今日イスラエルの王となりたるを知らざらんと。(サムエル後書19章22節)

此処に書かれてある悲劇はダビデの没落の各段階が論理的に述べられ得る事である。簡単な結論は無意味であるが最初の原因となる便法な行為からは当然得られる不可避の結果である。多少これはヤコブ書2章10節「人、律法全体を守るとも、その一つに驕かばこれ全てを犯すなり」の聖句と同じ意味である。孰れが悪であるかを知らうといろいろ選択するのは全ての邪惡に門戸を開いている事になる。次の力強い詩の一節を与えておこう。

我が扉を叩きし者は誰れぞ
いと小さき扉なりや
扉を開け声して叫べ

あ、諸々の惡魔は来たなり

新訳聖書の中でもこの点を強調している(およそ色情の念もて婦女を視たる時己が心は姦淫したるなり)亦、寛容は悔改めより大切である事を覚えておこう。日々の一見無意味な殆んど本能的な物事の決断は熟慮の上の結果ではない。若し我々の思慮が律法に基づくものであるなら、こうも悔改める必要はないであろう。誤ちを犯すなら、虚偽の再出發は意欲を殺ぎ、分別を鈍らせてしまふ。更正した大酒飲みは高い犠牲を払つてアルコールの害

ある事を知るのである。然し、此処での大切な点は悔い改めは充分な償いをすれば宣いと云う事ではなく、正しからざる行為を通して悔い改めの意志を失う恐れなのである。只、主の云われた如く「喜びて従順なる者」のみが救われるのである。(イザヤ書1章19節)

もう一度ダビデに戻ろう。主が自から示され、サムエル後書でも確認されている様に、主に対する深い愛がダビデの良い性格でもあった。強い怒りにも拘らず彼はサウルに復讐をしなかつた。彼の祈りは次の様な感動的な祈りであった。

ダビデ王入りにエホバの前に座して云いけるは主エホバよ、我は誰、我が家は何なればか汝此れまで我を導き給いしや。主エホバよ、此れはなお汝の目には小さき事なり。汝また僕の家の遙か後の事を語り給えり。主エホバよ是は人の律法なり。ダビデこの上何を汝に云うを得ん。其は主エホバ汝しもべを知り給えばなり。汝の言葉の為、また汝の心に従いて汝この諸々の大いなる事を為し、僕に此れを知らしめ給う。故に神エホバよ、汝は大いなり。其は我等が全て耳に聞ける処に依れば、汝の如き者なく、また汝の他に神ななければなり。(サムエル後者7章18—22節)

ダビデは一度悪い行為を悔い改め得ると考えて実行したが、再起するには血の汗を流すべき道を下って行った。詩篇一章を読むとそれがはっきりと描かれている。

悪しき者の謀略に歩まず、罪人の途に立た

ず、嘲ける者の座にすわらぬ者は幸いなり。

(詩篇1章1節)

此の中で悪に陥入る者は悪い態度—嘲ける者の座にすわる事—のせいであると説明している。我々は今邪悪なる人達と交わってはいないだろうか。この悪への参加こそ「悪しき者の謀略に歩んでいる」ことになるのである。

ダビデの生涯は第一段階では神への模範の態度として受け入れられるものの、第二段階で罪を犯すようになるのである。多分、彼は甥達の残忍さを知らず、それが解つてからもヨアブを通してアベルの殺害を願っている。その様な人達に囲まれてダビデはバデシエバを羅致しても何とも思わないように迄増長してしまっている。悔い改めようと務めた時、大きな打撃がやって来るのである。この一時的な行為に対しエマーソンの耳を打つ警句を提示しよう。

律法の勝利なくば汝に平和を与うる何物もなし。

討論の為に

1 いろいろの場合で我々の決定が律法に基づくものであるか、便法に依るものであるかを如何に見分け得るか。

2 いろいろな規則に従う場合、この世に存すものと存し得ないものとの例を提示しなさい。

3 我々は適用し得る「寛容」としてどの程度迄我慢出来ますか(人の欠点を是認し、友として交わる境界)

第一部 一完一



「キリストの贖罪」

全人類のためにイエスがなされた無限の贖罪のために、これまで地球上に生きていた者、いま生きている者、これからさき生を受けるはずの者が一人のこらず、かならず復活をします。またキリストの贖罪のために一人の罪はのこらずあがなわれましたから、そのために私たちはこころから悔い改め、罪のゆるしを得るためにバプテスマを受けました。無限の贖罪ということばは、はかりきれないほどという意味でありますからとくべつな意義があります。イエス・キリストは罪のないお方でありましたから、罪ののろいを受けた万人のために贖いをするのできるただ一人のお方でありました。アダムがエデンの園で罪を犯したときに、彼は自分が肉体の死と霊の死とを受けたばかりでなく、自分の子孫にまで肉体の死と霊の死とを伝えました。霊の死とは神の前から追いはらわれることとであり、肉体の死とは息がたえたとき肉と霊とが分離することとあります。

アダムとイヴは、罪を犯す前に不死不滅の身をもって罪を知りませんでした。ところが「墮落」をしたために死を受けようになり、善悪の区別をするようになって、その結果サタンに叩かれることになりました。しかし「墮落」をしてしまった状態においては、神の前に居れるという以前の状態にかえる力がありませんでした。アダムとイヴの二人は、肉体はもとの塵へかえり、霊はサタンの支配するところへ行くという死に直面しました。しかしながら、天上において明らかに述べられ、忠実な「先在の霊」たちが受け入れた福音の計画によってこの悲劇は避けられました。その福音の中には、キリストの罪のあがないを通してあがなわれるという計画が入っています。

もしもイエス・キリストの愛がなかったら、私たちは「墮落」の状態からもとへかえることはできなかったでありましょう。イエス・キリストが自ら進んでぎせいにかなりになったことによって、アダムの罪とあらゆる人類の罪の価が払われました。イエス・キリストひとりだけが、自分の命を与えて、またとりあげる力をもっておいでになります。イエスは不死不滅である父なる神から生命を、また肉の母から死をひきつぎなさいました。イエス・キリストの贖罪には二重の効果があります。第二に、全人類が復活によって死からあがなわれるということとあります。これがアダムの罪からあがなうこととあります。これによって、全人類が一人のこらず復活をするばかりでなく、太初から地球上に生を受けた全生物もことごとく復活をするのであります（教義と聖約二十九〇—三二—二十五参照）。第二に私たち一人一人は、もし自分の罪を悔い改めるならあがなわれるのであります。犯した罪は一つのこらずつぐなわれなくてはならないからです。慈悲といえども正義をなくすることはできません。イエス・キリストがどのようにして世の人の罪の重荷を負いたもうたかは、私どもの理解力ではおよびません。人間は罪のためにはげしい精神的肉体的苦しみを感じます。しかし、イエス・キリストが、罪の重荷を負いたもうたときに、どのくらい苦しみにたえたもうたかを頭の中に画いてごらんください。イエスの苦しみは精神と肉体ばかりでなく、霊の苦しみもあつたのです。キリストの贖罪によって、私たちは何の努力もせずアダムの罪からあがなわれたい。しかし、私たちは自分の罪を悔い改めるときはじめて自分の罪からあがなわれるのであります（教義と聖約十九〇—十五—二〇参照）。もし私たちが悔改めないなら、イエスの苦しみは私たちのために何の効果もありません。効果がないばかりか、私たちはイエスが苦しまれたと同じように、自分の罪のために苦しむほかにないのであります。

伝道本部だより

バプテスマ 一九六二年九月

林金 山古 芝木 法広 高増 増小 今群 添福 湯水 旭辻 竹大 桶深 阿倍
 沢野 閑本 橋山 島橋 村村 林井 馬田 岡岡 浅口 川内 西川 江野
 葉真 久一 西恵 千和 秀二 美早 悦康 俊妙 悦和 エミ
 子純 義之 伸子 恵子 子子 男子 苗子 子子 二子 子子 子子 子子
 奥西 佐小 新森 小末 倉松 横岡 永京 七柴 坂内 井伊 今甲 田石
 の宮 藤林 瀧下 原沢 名古屋 本井 野都 卷田 本藤 内藤 内藤 橋府 川代
 和寛 時好 健和 寿深 千智 七卷 田道 雅悦 征孝 幸雄 正一
 子子 俊美 司修 視子 雪郷 恵子 千子 千代子 子子 子子 子子 子子
 鈴末 沢西 中中 松小 兒辛 木藤 東三 佐野 小西 宮紀 家細 細岡 庄
 木国 田村 村畠 本山 山玉 田幡 本宮 藤城 樽川 倉川 井町 岡司
 成富 尚英 晴恵 智美 矜光 美勝 正重 重君 英靖 和晴 英俊 公
 一子 久子 兆子 美代子 子子 子子 子子 彦雄 子江 明弘 豊美 世俊 子子
 渡葛 平東 山酒 中東 是金 東塚 岡柳 丹菅 本仙 山山 佐齐 西札 辻上 内壺 田タ
 辺籠 石京 南根 井村 北永 子子 京東 田田 中央 中 央 田 丹 原 郷 台 脇木 々々 藤嶋 嶋 本 田 井 康
 洋貫 和 蜜正 邦文 治雅 万里 浮テ 健哲 夏美 美喜 壽早 祥康
 子都 敏 子恵 之子 美子 子子 一子 子子
 富沢 酒安 札山 若辰 田高 佐小 尾小 森池 後藤 藤藤 小多 石江 安光 岡田 横上 東京
 沢田 井藤 幌本 井田 村橋 木々 山内 久原 山見 藤藤 原松 樽田 原国 藤岡 山中 浜領 西
 浄純 義秀 清敬 笑紀 洋郁 三多 静芳 敏昭 弘真 広明 淳迦 真泰 泰司
 子子 雄臣 恵子 子子 子子 介子 枝子 代子 子子
 青東 川片 平長 青東 安種 種齊 小武 望持 京前 石平 井東 飯藤 安阿 山庄 中仙
 木京 南端 岡上 谷川 柳北 井田 田田 藤原 藤藤 月田 原川 川上 井井 中央 田山 達倍 山口 子村 台
 洋一 洋二 峯佳 美晴 稔桂 義安 千利 康喜 由和 登孝 素節 勝邦
 子男 子稔 郎生 孝恵 美男子 一子 洋子 子子
 塩中 水水 小磯 長横 山仁 柳新 村山 尾仁 中松 少石 東京 山山 鈴中 二松 北伊 市後
 崎田 島島 林谷 川浜 本田 井関 田形 島平 山山 原原 松井 西崎 崎木 村田 井上 藤村 藤
 房久 篤裕 京清 輝 恵子 子子 君代 知京 真理 洋茂 尊誠 鏡誠 秀美 喜清 日敏
 子一 孝清 子子 子子 恵子 子子 代代 子子 子子 子子 介樹 士太 子男 子子 子子 江出 夫



ペギー・ヒュイシ・アンダーセン姉妹

私はお夕食をいただいていたとき、テーブルごしにこしかけている私のうちの四つになる坊やにむかってじょうだんまじりに言いました。「坊やのうつくしい大きなおめめは誰にももらったの」、そうすると坊やはとてもまじめになつてすぐ「天のお父さまが下さったの」とこたえました。うてばびっくりようなこのこたえを聞いて、私はいろいろなことを胸の中で考えはじめました。ほんとうに、天のお父さまは坊やにあの美しいおめめを下さいましたが、そのうえに命さえもおさずけになつたのです。そこで私は心の中で「ほんとうにこの何ものにもかえ難いようにせつな子は、神さまについてよく教えてもらっているのだろうか。私は毎日あらゆる機会をとらえて、天にまします、慈愛ある親切な、生きてまします父なる神さまのことをこの子に教えているだろうか。私はこの子にどうしてこの世へ来ているかそのわけを教えて

いるだろうか。私はイエスがどんなお方か坊やにわかるように手助けをしているだろうか。イエス・キリストがほんとうに天の父なる神さまの御子で、イエスがこの世へおいでになつたのはあらゆる人間に父なる神さまが下さった一番大きなおくりものであることを坊やは知っているかしら」と考えました。

もうじき私は、うちの坊やをはじめそのほかの子どもたちに救い主のご誕生と使命について教える最もよい機会にめぐまれるにちがいありません。もうじきクリスマスMASの季節がまいります。このときこそ、私たちがほかの人に福音の真理を教える一番よい時ではありませんか。

私は日本でも沖縄でも一度もクリスマスMASをむかえたことはありませんが、アンダーセン伝道部長は私に、クリスマスになるとあらゆる店が色とりどりのすばらしいかざりつけをして、通りの上もビルの中も人の波で大にぎわい、町全体が興奮と歓楽の空気につつまれてしまうのだと言つてきかれます。どこへ行っても、人々は愛する人たちのためにおくりものを買っています。おくりものをすること、クリスマスMASの季節中のたいせつな行事です。昔、あの羊かいたちも博士たちも、お生れになつたばかりのイエスさまのところへほんとうにおくりものをもってきたからです。しかし、極東の国の人たちはクリスマスMASをお祝いするわけを理解するさきに、クリスマスMASの季節にはどこへ行っても見られるおくりものと興奮とパーティーという慣習をとりあげてしまったにちがいありません。西欧諸国の人々の中にさえ、今はクリスマスMASのほんとうの意味がわすれられかけています。今年こそ、私たちは母親として娘たちとして姉妹たちとして、また教会員として、私たちの話によって、習慣によって、ま

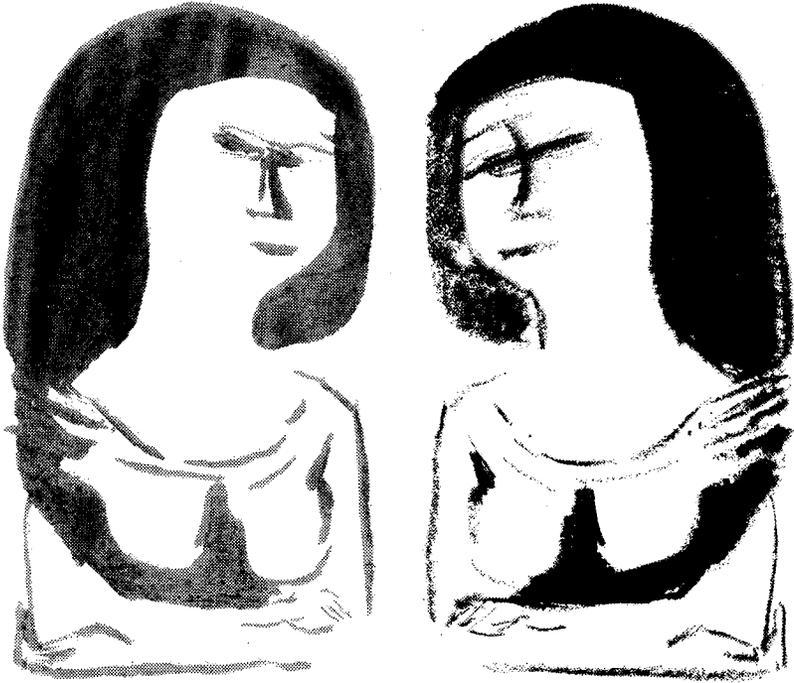
たあらゆる行いによってクリスマススのほんとうの意味をつたえる役をひきうけようではありませんか。

両親として、私たちは自分の子供たちに、はじめてイエスがお生れになった夜のことをくりかえしくりかえしお話することができません。子供は誰でもみなお話がすぎです、そのうえ聖書の中には救い主のお生れになったときの話がたくさんのつています。マタイをはじめ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書にいたるまで、ナザレのイエスの誕生とその一生とについて多くの記事がのっています。その中の話はひとつひとつみなほんとうの話であって、子供たちはそのひとつひとつを目の前に見るように話してもらうことをころからよろこびます。子供たちは、イエスの母マリヤがロバにのり、父のヨセフがそばにつきそい、何事かがあつたらすぐにマリヤを守りマリヤをかばうようにして、石ころ道をエルサレムへむかっている話をあなたがするとき、あなたと一しよに感激にふるえるでしょう。また父のヨセフがどこをさがしても宿屋へとめてもらえなかつたことを知ってあなた一しよに悲しむでしょう。また、イエスが馬小屋の中でお生れになったときにまわりに居た動物たちのなき声をきくことをよろこぶでしょう。子供たちは、あの羊かいたちが「おそれるな、みよ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える」という声が天からくるのを聞いたとき、ほんとうに胸をおどらせるにちがいありません。また、あの羊かいたちが、生れになったばかりのイエスにおめにかかつて、とてもうるわしいおくりものをしたとき、ほんとうに満足をして幸福になるにちがいありません。子供たちは赤ちやんのときのイエスのお話し、大きくおなりになつて、苦しんでいる人たち病氣の人たち悲しんでいる人たちにめ

ぐみをほどこしていらしやる神の子としてのイエスのお話しを聞くことがすぎです。また、子供たちは苦しめられておいでになるイエスや、イエスを十字架にかけた悪い人たちの話を聞くと思しくなつたり、イエスがなせ死にたいとお思ひになつたか知らと不思議になつたりします。それから、キリストが死人の中からよみがえりなかつたとき喜びに胸をおどらせ、その目は生き生きとかがやきまです。まことにこれらはみな、ほんとうのクリスマススの意味を物語る話の一部にすぎません。イエス・キリストの福音を伝えることばこそ、クリスマススのほんとうの意味を語ることばであります。

これらの真理を、ほかの人たちの心の中に生きてはたらかせるのは両親ばかりではありません。私たちひとりひとりには、これらの真理を友だちや、愛する人たちや、知りあひの人たちにあかしをすることが出来ます。クリスマススの時は愛をあらわす時でありますから、私たちは自分の愛を示すために物質的のおくりものをすることがあります。しかし、これは愛と好意とを示す一つの方法にすぎません。愛と好意とを示す別の方法は、私たちの理解している福音の諸原則を身を以て示し、イエスがなされたようになさけ深いことの模範になることであります。また別の方法は、昔キリストがお生れになった夜に天使たちが唱つた「喜びのおとずれ」を告げることばを伝えることであります。あなたがたが、このクリスマススの季節に日曜学校 M I A、扶助会などの集りや活動でお受けになるにちがいないすばらしい経験を、あなたの友だちや愛する人たちもあなたと一しよに受けるようさそつてあげて下さい。

(814頁に続く)



母親ルシイ・マック・スミスの語る

ジョセフ・スミスの生涯 (三)

第三章 ロヴィザとロヴィナ

私の姉にあたるロヴィザとロヴィナの二人の生涯は、楽しみも苦しみも共にわけ合った姉妹の固くむすばれた生涯であったので、私はこれを二つに分ける気ありません。

二人の信仰も愛も行いも「永遠の生命」をのぞむ希望もまったく一つで、いつも二人いっしょで離れたことがなく、クリスチャンとしての義務がわかるほどに成長した時には、二人でいっしょに祈り、二人でいっしょに神をたたえる歌を唱いました。このような姉妹の愛情は年をかさねると共に深くなり、心が成長すると共に成長してゆきました。こうして二人はいっつも愛し合ってほがらかな生活を送っていましたが、ロヴィザが結婚をして家に居なくなると、ロヴィナは一人になってたえきれないさびしさを感じました。

ロヴィザは、結婚をしてから二年ほどたったとき重い病気にかかって妹のロヴィナを迎えにやりました。ロヴィナは、思っていた通りすぐにロヴィザのところに来てそのまま二年間、どんな名医もおよばぬほどの手当と看護をつづけました。そして二年がたつとロヴィザの病気がやや衰えて回復のきざしが見えてきました。

ここで、ロヴィザの病氣中に起った一つのことについてお話ししますが、読者の中にはとうてい信じられないとお思になる方があるでしょう、それでも数知れぬくらい多くの人が実際に目で見

り、私これからお話ししようとするのがほんとうかと聞かれたら、ほんとうですともと答える生き証人が、むろん今でもたくさんあります。

前に申しましたように、ロヴィザは二年間療養をつづけた結果いくらかよくなりかけたのですが、間もなく急に病勢が悪化して倒れ、このたびはますます悪くなってとうとう物も言えなくなり、まったくやせ衰えて、看護の者が寝がえりをさせようとしても、それさえできなくなりました。

ロヴィザの口に入るものはわずかの重湯だけ。このような有様で三日二晩寝たきりでありました。ところで三日目の夜、二時ごろでしたか、ロヴィザは細い声でロヴィナの名をよびました。ロヴィナはまるで守護の天使のようにロヴィザのまくらもとにつききりて、どんなすこしの変化も見おとすまいと一意専心ロヴィザを見守っていたのですが、今ロヴィザが自分の名をよんだのでびくっとしました。

そこでロヴィナは、姉のやせおとろえたからだの上へかがみこむようにしながら、胸をはずませて「姉さん、姉さん、何なの？」と聞きました。

するとロヴィザは張りのある声で「神さまが私のたましいもからだもなおして下さったの。私を起して着物をきせて。私起きたい」と言いました。

ロヴィザの夫はつき添っていた人たちに、彼女の言うことをきいてやって下さい、もう命の長くない病人は死ぬ前にちよつとよくないと云いますが、十中八九これもそうなんですから、最後のねがいを心よくきき入れてやって下さいと言いました。

つき添っていた人たちはあまり気がすすまなかったけれどもその通りにしました。ロヴィザがこんな衰弱したからで無理をしたらすぐに死んでしまうと思っていたのです。

ロヴィザをたすけてベットの上に取りかきあげらせるとみんなで着物をきせました。手をとって床の上へ立たせるとからだの重みで足首の関節が両方ともはずれてしまいました。それでもベットへかえるのはどうしてもいやと言ひ、ぜひ椅子にこしかけさせて、足首の関節がもとに戻るように両足をそつとひっぱってちょうだいと言いました。そして夫に、葡萄酒を少しもって来てとたのみ、そして私は少しの間とても元気になりますわと言いました。

それから間もなく私たちは、ロヴィザがたのむので、ロヴィザをたすけて道のむこうがわにある「義理の父さん」のところへつれて行きました。「義理の父さん」はそのとき病氣のため弱って寝ておりましたが、ロヴィザが家へ来たのを見るとびくくりして大きな声をあげました。

「ロヴィザが死んで幽霊がやってきた。わたしが急に死んでしまうぞということを言いに来たにちがいない」。

するとロヴィザは「いいえ、お父さま。神さまが私を起たせて下さいました。私はお父さまに、いつ死んでもよい覚悟がおりなさいますようにお話しにまいりました」としつかりした声で申しました。そして、一時間ほど話をしてから、夫やその晩つき添っていた人たちに助けられて道を横ぎり、また自分の部屋へ帰ってききました。

この話がばつとひろがると、この時起つたびくくりするほどめずらしい出来事について見たり聞いたりしようとしてたくさんの人々

が集つてきました。ロヴィザはこの人々にすこしの間話をしてから讃美歌を唱い、それから帰ってもらいましたが、別れるときに、あしたは教会でお目にかかります。その時私の病気が不思議にいやされたことについてくわしく話をいたしますと約束しました。

あくる日、ロヴィザは約束通り教会へまいりましたが、もうその時にはたくさんの人々が集っていました。ロヴィザが教会へ入りますと間もなく牧師さんが立ちあがり、今日ここへお集りになりました。みなさまは、もちろん昨夜この近所で起りました不思議な出来事についても一度聞くためにおいでになっているのでありますが、私としましても説教を聞くよりもその方にもっと興味をおぼえておりますよ、今日はその話をしってもらうこととしてタットル夫人とかわりましようと言いました。

それから牧師さんがロヴィザに讃美歌を唱って下さいとたのみますと、ロヴィザはその通り讃美歌を唱いましたが、その声は健康なときと少しもかわらない高い調子のすきとおった声でした。讃美歌を唱つてしまうと、ロヴィザはたちあがって、集った人々につぎのような話をしました。

「そのとき私は霊界へつれて行かれたような心持でした。そして私はそこで救い主にお目にかかりました。それはくもの巣ぐらいうすいヴェールをすかして見るようでしたが、救い主は、お前ももう一度帰らなければならぬ。それは人々にいつても死ねる覚悟をもてと教えるためである、またいのりが大切であるとおなじようにいつでも油断のないことが大切であると説き教えるためである。また人々は神に対してそれぞれの行いの申しひらきをしなければならぬことと、かならずキリストのさばきの座へよび出されなくては

ならないことをまごころから宣べつたえるためである。お前がこれらのことをするならば命をのぼしてあげると仰せになりました。そのあとひきつづきロヴィザは、人の命のはかないことについて多くのことを人々に話しました。

話がすんでこしをおろすと、ロヴィザの夫と妹と、そのほかロヴィザの看護をするためきのう一晚ロヴィザのそばに居た人々がつづいて立ち、ロヴィザがつぜん癒されるすぐ前の様子がどんなであったかをあかしました。

この奇蹟的な出来事についてロヴィザはそれから三年の間おめず憶せず誰にも話しつづけましたが、三年たつてから肺の病を得て、それがためにとうとう亡くなりました。

前に述べたように、ロヴィザが奇蹟的に病から癒えずこし前、ロヴィナはひどい咳になやまされましたがとうとう肺の病気にかかりました。そして三年間はおかしくない状態ですごしていましたが、その間いつも、間もなく近づいてくる最後をひじょうにおちついた心で人に話し、神をおそれ神の前に正しい行いをした人の最後だけに見られるほがらかな心持ちで死のことを考えていました。ロヴィナは自分より年下の友だちに、人間はこの世にいつまでも生きていられるはずがないので、この悲しみの多い浮世をこえたむこうにある「虫くいさびくさり、ぬす人がちて盗まざる」宝をのぞまなくてはならぬことをせひ忘れないようにして下さいと言っていました。

ロヴィナの病氣中の世話をする仕事はおもに私の肩へかかってきました。それはゆううつな悲しい仕事でありましたが、私はきげんよくやりました。そしてロヴィナには、ほかにいろいろたくさん世

話をしなくてはならないことがありましても、私はロヴィナの病氣中は、片時たりともそばを離れず、いつも声のとどくところに居りました。

病氣が重くなつて、ロヴィナがとうとう息を引きとつたのは夜中のことでしたが、その前にロヴィナは私をよび起して「私はもうじきに死んでしまうんだからお父さまとお母さまを呼んできてちょうだい」と言いました。そして、両親がそばへ来ますとロヴィナは「お父さま、お母さま、私はもうじきにおわかれています。その前に私の友だちに話しておきたいことがありますから、みんなを呼んで下さいませんか」と言いました。また私には「ちよつと椅子にこしかけさせて」とたのみました。そして、友だちが部屋へ入ってきて前にこしをかけますと話しはじめましたが、少し話すと、それをやめて母に「お母さま、何か食べ物下さいませんか。もうこの世の食べおさめてございますから」と言いました。母がたのみに応じて食べ物をもつてきてやりますと、少しばかりですがおいしうに食べてからお皿を返し「さあ、お母さま、これがわたしの食べおさめてございます」と申しました。

(810頁の続き)

私たちの中には、おくりものをするためのお金や物が無い人がたくさんあります。しかし、私たちはみな自分相応の力をもっています。私たちは誰でも奉仕や親切な行いをすることができ、愛のあることばや思いやりを与えることができ、好意をあらわすことができます。私たちがみなクリスマスに受けるすばらしい感じは、色電燈や飾りたてたクリスマスツリーやピカピカの包装をした箱などによるものではなくて、私たちの感じるお互いの愛やキリストのお示しになった兄弟愛によるものでなくてはなりません。これこそ、キリストご自身がその誕生日の祝いに際して私たちに思い起させようとしておいでになるものであります。私たちはキリストの御使命、キリストのおくりものである永遠の生命、私たちがすべてを将来キリストと共に住まわせたいと思っていらつしやる望みなどのほんとうの意味をよく考えてみる時間があるように、家の中のかざりたて、教堂の裝飾、お料理、お掃除、おくりものを買うことなどの物質上の準備でわすらわされることのないようにしましょう。それよりも、私たちがもっているたまもの(福音の光)を、私たちの子供たち、私たちの友だち、私たちの愛する人たちにわけ与えて、これらの人たちもまた「かれらの心のうちに平和、すびての人に對しては善意」ということばのほんとうの意味がわかるようにいたしましょう。

扶助協会 レッスン

「神学」(千九百六十三年一月の最初の集りに)

第四十四課「神の誠命を守る時のよい酬い」

テキスト「教義と聖約」五十九〇 十五—二十四)

目的「神の誠命を守る忠実な人々に対して神がなさるいろいろな約束について学ぶ。

はしがき

先月のレッスンで私たちは、予言者ジョセフ・スミスがポリイ・ナイトの葬儀に列席した日に、主なる神さまが聖徒たちのころをなさるためにひじょうにたいせつな啓示をたまわったことを学びました。それは、死んだ人々がひきつづいて喜んで活動をする未来の生活について希望を与えることばでありました。また聖徒たちは、予言者を通して与えられた啓示を受けたいろいろの誠命によって、めぐみを受けるにちがいないことを知りました。これらの誠命の一つは、主の安息日を正しく守

ることでありました。安息日を正しく守るについて八つの積極的な要求があることと、それらについて先月のレッスンで一つ一つあけて習いました。また安息日をやることについて与えられた大管長会からの公式のことばについてもならいました(十一月号の扶助協会レッスン参照)。

「汝ら感謝と愉快なる心と顔容とを以てこれを為さば」

もしも私たちが安息日についての誠命を守り、そのほかの誠命もまた忠実に守るなら私たちは豊かな収穫を与えられるにちがひありません。しかし、教会員が神のみこころにしたがうとき、何をすればよいですか。それは、第五十九章の七節にあるように、神に感謝をするはずであります。次は同でしょうか。

教会員が、安息日を聖くせよといふ誠命を守るときには喜びを受け、豊かな祝福が約束されます。(教義と聖約五十九〇十五—十九

参照)。すなわち、いろいろな誠命を守るときには天のめぐみを受けます。十五節から十九節までを讀むと、地から生ずるもの、すなわち食物、衣服、住居などが人の肉体と霊とを強めるために与えられる目的がのべてあります。以上の節の中にはまた、さきの啓示でべられたと同じ思想が暗にふくまれています。すなわち、肉体にかかわるものと考えられているすべての律法も誠命も実は霊にかかわるものであります(教義と聖約二十九〇三十四—三十五参照)。

たいせつなことは、地から豊かに生ずるものは万人に与えられるけれども、適量に用いてむさぼってはならないということであります(教義と聖約四十九〇十九、五十九〇二十参照)。地の生ずるものは平等にわかすことができれば理想的であります。地の生ずるものを人より多く受ける人々は良識をもってこれを用いるばかりでなく、ほかの人々を出しぬいてむさぼらぬように心しなくてはなりません。

「而して、すべてこれらのものを人に与えたるは神の悦びとするところにして、この目的のためにこれらは造られたれば、人は適量

にこれを用いて貪らずまたは無理にとりて用うべからず」(教義と聖約五十九〇二十)。

人間が地上の生活をするために与えられた「神の創造物」を人間がとって用いるときには、適度で誠実とをその指針にしなくてはなりません(教義と聖約四十九〇二十、モルモン経ヤコブ書二〇十八—十九参照)。デビッド・O・マツケイ大管長はかつて「富を中心にした生活はいけない」と強く言われました(「福音の理想」三九三頁参照)。またヒーバー・J・グラント大管長も「富も主のみこころにならないうるなら祝福となる」とはっきり言われました(「福音の標準」一〇八頁参照)。

「人間の罪」

神の怒りは、神のみこころを知っている神の誠命を無視する人々に下ります。神の怒りは、神が権能をもって世に来りたもうときに現われるにちがひありません(教義と聖約一〇九—十参照)。悪人たちは、律法を破って神の不興を招いたために、神の怒りを感じるにちがひありません(教義と聖約百二十四〇四十八参照)。いっつまでも悔い改めしない人々は正義の要求に応じて処分されるにちが

いありません（ニーフアイ第三書二十八〇三十四―三十五参照）。

安息日の誠命に従う忠実な人々が受ける物質的の祝福について主がみことばをたまわったとき、主は人間が、主なる神の主権を完全に受け入れ、創り主に完全にたよることが必要であると強調なさいました。すなわち、

「およそ人何事にも神を怒らせずまたは何事にも神の怒り燃ゆることなし。ただしすべての事の中に神の御手のあることを告白せず、その誠命に従わざる者に神の怒りあり」（教義と聖約五十九〇二十一）。

人間は、自分のために天の父なる神が与えたもうた地と地から生ずるものを有難いと思わなくてはなりません。ジョセフ・F・スミス大管長は、神が与えたもうすべての真理を人間は感謝しなくてはいけないと教えました（福音の教義）第九版五―六頁参照）。モルモン経に出てくるニーフアイ人であるベンジャミン王のようによつて神の仁慈を感じたものにとつてその答えはいつも「その通り」であるにちがひありません。ベンジャミン王はその臣下に奉仕をするために骨折って働らきましたから、

臣下はそれに対して感謝をしませんでした。この王をニーフアイ人たちが天の王に対して感謝をしなければならぬことを教える一つの機会に利用しながら、ベンジャミン王は言いました、人が全身心をつくして神に仕えても、それでもまだ益にならないしもべである（モ―サヤ書二〇二―二二一参照）。主なる神を、人に生命を与えられた地に地の豊かなものと与えられた創り主であることと認めるだけでは、現在信じて神の命令に従うために大きな役に立つとは思われません。

私たちは末日聖徒として、ニーフアイ人から教訓を学ばなくてはなりません。地の豊かなめぐみを与えられたときには、これらが主によつて与えられたものであることを悟って、これらのものを主から任せられて管理するのが私たち国家が没落したのはその高慢によることを知ってください（教義と聖約三十八〇三十九参照）。

「神の誠命に従え」

ニーフアイ人は、もしも神の誠命を守り行ふなら約束の地に於て栄えるであろうというたとくべつな

約束を与えられました（ニーフアイ第一書四〇十一、ニーフアイ第二書一〇二〇、ニーフアイ第三書五〇二二参照）。これとおなじ約束がまた末日の聖徒たちにも与えられています（ニーフアイ第二書一〇十九、教義と聖約一〇四十九―一五十一参照）。人は生活上いろいろなめぐみを与えられることに神の手が働きたまうことを認めても、神の誠命を守らなければ十分に神がお喜びになりません。私たちは、主イエス・キリストが

人類の「救い主であり贖い主である」という信仰をもって、その信仰にもとづいて神の誠命を守るべきであります。人が誠命を守ろうとする原動力の強さは、その人が救い主と父なる神とに対する態度によつて大たい異なります。私たちは救い主と父なる神のおかげによつて生活をし、管理人として地から生ずるものを利用する機会にめぐまれているではありませんか。私たちは、これらのめぐみに対しては主なる神に感謝をささげなくてはならないということを真実信じていますか。人は神から物質と霊

とにかかわるしあわせを与えられているから、神の誠命を守らなければならぬとすぐに考えます

か。前に述べたように、誠命を守ることによつて感謝をあらわさない人々は神の怒りを受け、神の怒りやこれらの怒りに対して燃えたと予言者は言っています（教義と聖約五十九〇二十一参照）。すべての者が神を王の王であると告白し、自分たちがまことの弟子であることをためす機会をそなえたこの世の生活を「与えた者」として神を認めるにちがひないときがかならず来ます。

「偉大な真理」

第五十九章のむすびのことばとして、聖典の中にある偉大な真理の一つがしるしてあります。すべて信ずる者が「永遠の生命」に至る生活をする道を知るために、主は啓示のことばをもつて仰せになりました。

「されど汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。主なるわれこのことを語り、而して「みたま」これを証をなすなり。アーメン」（教義と聖約五十九〇二十三―二十四）。

この真理には、父なる神が神の子であるすべての人類にお与えに

約束があらわれています。人は良い報いが父なる神のお与えになる祝福であると考へるときに、誠命を守る者たちが主のめぐみを受け、そのことを忘れてはなりません(二一フアイ第一書十七〇三十五参照)。

「正しき業のくわしい説明」

前の聖句の中に言つてある良い報いを受けるために必要な正しき業とは何でしょうか(教義と聖約五十九〇二十三参照)。人は「誠命を守れ」というかも知れません。しかし、私たちはこのような

一般的なことばで以てかならずしも目的が達せられるわけではありません。多くの予言者が靈感を受けて主の民に誠命を守れというときは、そう言われた聖徒たちはすでにその誠命をよく知っていたと思われまゝ。私たちはかならずしも聖典や現在の予言者たちの著書を充分に読んで、主のみこころをくわしく知つておられるわけはありません。それでありませうから、正しき業についてすこしくわしくお話しすることが必要であると思えます。たぶんこの話は多くの方にとっては復習になるでしょうが、またほかの方にとっては理解を進める役に立つかも知れません。そ

れでも、私たちはそれをもつて、私たちが神の前にとどのような状態にあるかを一々しらべる一つの機会にしないであります。この考へをよくあらわしているのは、教会員たるものは自分の任命された務めを全くよくつとめよ、といふことである(教義と聖約百七〇九十九参照)。

次に、正しき業についていくつかの重要な事項を考へてみましょう。これはすべてに完全な提案でもなければ重要な順にならべたわけでもありません。

「完全にたつと努める」

主の前に義しくあるために最初にとる手つずきはいろいろありますが、その中の一つは神の御国に入るためのバプテスマを受けることとであります(マタイ伝三〇五二一フアイ第二書三十一〇五十一参照)。この手つずき、すなわちバプテスマを終つたら、教会員がなすべき正しき業とは人生の目的をたえず心に銘じていること、すなわち完全にたつと努力することとであります(マタイ伝五〇四十八、二一フアイ第三書十二〇四十八参照)。完全にたつとする純

粋なねがいの中には、その教会員が自分からあらゆる悪を除こうと

している意味があります(モロナイ書十〇三十二参照)。この目標を達成する一番好結果な方法は「心をつくし、勢力と思いと体力とをつくして主なる」神を愛することとあります(教義と聖約五十九〇五参照)。キリストに対する愛、しかも「信仰によつて働らく愛」をあらわしなさい。このよう

な愛はキリストに対するとおなじ感情をすべての人に対して生ずるものであります。もともとこのような愛は、キリストが贖いのぎせいとなつて、一人一人のためにして下さつたすべてのことによつてキリストにすつかりおたよりするということ実感から出てこなくてはなりません(二一フアイ第二書三十一〇八十一二十参照)。

義しくなるための二番目の大きな歩みは、教会員の生活が完全にたつと助けることとあります。自分が救いを得るために努力をして行くうちに、ほかの人々のことも考へるといふことは必要なこととあります。ほかの人々に福音を教へることは、教へる人はもちろんのこと教へる人の生活を完全にするためにも役立ちます。

「宣教師の働らき——義しいこと」

教会員がキリストを信じて受け入れたとき、前に言つたほかどのような責任が生じますか。教会の目的に対して責任があると答へるなら、その中でも宣教師プログラムを遂行することが一番目立っている責任であります。教会員一人一人は、福音を教へるといふ正しき業をする責任を帯びていります。もしも教会員がほかの人々に福音を教へなかつたら、ほかの人々が救われない責任は福音を教へない教会員にあります(教義と聖約八十八〇八十一一八十二参照)。ある

宣教師が召されることもある正式の宣教師プログラムに加えて、一般教会員にとつてはそのほかの機会があります。非教会員に福音を説くのはもちろんのこと、非教会員を宣教師に紹介するのも一つの方法であります。

宣教師を財政的に助けて伝道をさせること、またはほかの人々と共に宣教師基金に寄附をすることも別の方法であります。また、教会の補助組織の中で福音を教へることによつて宣教師の働らきをすることもできます。しかし、その教師である人が改宗者を獲得しようとするなら、その人は宣教師の態度を自分の態度にしな

くはなりません。マーク・E・ピーターセン長老は改宗者を獲得する必要を指摘して次のように言われました。

「クラスで福音を教えて改宗させることはまったくいせつなことである。教会の会員一人一人でさえも完全に改宗しなくてはならない。しかし、改宗は上手な教授によってはじめて実現することであり、上手な教授の中には正しい教義が含まれていなくてはならない。正しい教義は教会が与える公式の文献や発表の中に見出される。私たちはこのような資料によって正しい教義を得るはずである。

改宗は個人の将来の全生活に与ってきわめてたいせつなことであるから、一人一人に正しい教義と行いとを身につけるように改宗をさせ、どのように誠実であつても個人のまぢがった見解を身につけて改宗しないようにあらゆる注意をしなくてはならない」(あなたへの信仰とあなた自身)四十頁参照。

「死者のために動らくこと」

教会の会員が自分が縁のある死者に対して為すべき責任を果すように、教会員がいろいろの便宜を

与える責任をとることは正しき業であります。この活動はほかの人々が救われるように力を与える最も直接的な方法の一つであります。人は今生きている人々の「救い手」になることもできませんが、またこれまでに世を去つた無数の人々の「救い手」になることもできます。この正しき業の中には神殿の儀式も系図の探求も入っています。

「ほかの人々に奉仕をする」

福音を實行すること、教会の活動に従事することは一つのこゝら、ほかの人々にとつて模範となら強調してもよろしい。聖典に「お前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである」(モーサヤ書二〇一七)と言つてあるからであります。人は什分の一、断食献金、支部予算、建築基金、そのほかの献金にあらわれるような物質的財産を寄附することによって、教会を通してたえず正しき業をすることができまゝ。実際に、ほかの人々への奉仕に役立つ正しき業があるなら、それはこのような献金のかたちで、自分を忘れて人に与えることでもあります。

「指導者に従え」

ほかの人々が進歩をするために、神権者による福祉計画、扶助協会の会員による福祉計画などのような価値のある教会の計画に参加することは、正しき業の中でもひとさわぬきん出ている業であります。このような組織による方法によつてはじめて会員は誰でも、自分の財産を貸して人々に分け与えることにより(モーサヤ書四〇二十六一二十七参照)、日々自分の罪のゆるしを一部分たもつことができるのであります。

前に述べたように、人類のためになるいろいろの目的を實現することのできる神聖な制度としての教会については、私たちが管理する人々が与える勧告に対して、完全な信頼をよせなくてはならないことは言うまでもありません。主のしもべである人々を通して与えられる主のみこころに従つて会員たちが完全になるよう、啓示がひきつづいて与えられています。これ以外の方法で救いを得ることはできません。

「毎日実行する宗教」

正しき業は毎日あらわされるべきであつて安息日だけのものではありません(教義と聖約五十九〇

十一参照)。ジョセフ・F・スミス大管長のことばから、私たちは次のようなことを学びます。

「私は諸君に、キリスト教が日曜だけの宗教ではないということをご告げたい。キリスト教は瞬間の宗教ではない。キリスト教はいつまでも終らない宗教である。キリスト教はその信者に対して、安息日におけると同様、月火水木金土の各日にもこゝろから誠実にまた強力にその責任を遂行することを要求している」(福音の教義)第九版三九四頁参照。

「正しき業のよき報い」

私たちの使つてゐるテキスト(教義と聖約五十九〇二十三参照)にあらわれているように、正しき業に与えられる最初の報いはこの世の平和であります。たしかにこの平和は、戦争がキリストの再臨以前にやむという意味ではありません(教義と聖約一〇三十五、八十七〇六、九十七〇二十二二十三参照)。正しき業をする人々は、騒動や争ひや苦難が世の中にあつても、いつもそれと関係なく正しき業に対する報いとして平和を業しむことができます。その平和は心の平和、安全な感じ、動かない確信、霊のよろこびであつ

て、これらは正しき業がすで行われまた今行われてるので、聖霊によってのみ生ずる平和であります(ジョセフ・F・スミス著「福音の教義」第九版、百二十六―百二十七、千九百六十一年十二月扶助協会レッシンの第三十八課参照)。イザヤは「この平和を」とこしえの平安と信頼である」(イザヤ書三十二〇七参照)と言いまわりました。

正しき業に与えられる第二の良報であり、父なる神がその子らである人間に授けたもう最も大きな贈り物は「永遠の生命」であります(教義と聖約十四〇七参照)。

永久に生き通しであるという性質は、人間のもっている永遠なる霊の性質であり、復活によって霊と体とが結合した「復活体」として永久に生きるは「不死不滅」と言われています(教義と聖約八十八〇十四―十六参照)。この地球上に生を受ける者はすべて復活して「不死不滅」となりますが、「永遠の生命」は神のようになる者だけが受けます(教義と聖約二十九〇四十三、モーセの書一〇三十九参照)。「永遠の生命」すなわち「日の栄の国の最高に昇る

こと」は神のようになり「霊のふえる能力」(霊の子を生む能力)をもって、父なる神と共に住むこととあります(教義と聖約百三十二〇五―五十七、九十一―九十二参照)。この世に於いては福利を受け、次の世に於いては「永遠の生命」を授かる保証を受けるくらい、人にとって大きな祝福はありません。

このレッシンのテキストは安息日に関する啓示から出ています。安息日を守ることによって与えられるよい報いはたくさんあります(これらの祝福は安息日を守るだけによって生ずるのではなく、そのほかの誠命も守る結果であります)。それで、主なる神は、主の民はすべてのことの中に主の御手のあることを認めて誠命を守れ、さ

次の世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を受けんと、はっきり仰せになりました。

考察のための質問

(一) すべての事の中に主の御手があ

ることを認めるだけで充分祝福がさずかりますか。
(二) 「永遠の生命」を得るために、全身全霊をつくしてイエスキリストを愛さなくてはなら

ないことを論じなさい。

(三) ほかの人々に奉仕をするには、人はどのようにして自分を与えることができますか。

(四) 神の誠命を守ることによって生ずる良い報いは何ですか。これについて論じなさい。

訪問教師のメッセージ 千九百六十三年一月八日(火)

「教義と聖約」にもとずいて実践する真理

メッセージ第四十四

「汝らは時を空しく過すことなかれ」(教義と聖約六六〇十三) 目的―人はその時間を賢くまた最もよく利用することが大切であることを強調する。

私たちはみな性質もかなりちがっているし、体格や体力も、能力や才能も、いちじるしくちがっています。それにもつかかわらず、誰でもみな平等にもついている貴い財産があります。それはほかでもない時間であって、私たちは誰でもみな一日に二十四時間の時間をもっています。これは身分がちがっていても国籍がちがっていてもすこしもかわりなく一律に平等であります。この二十四時間という時間を私たちが一日一日どう使うか

によって、私たちが一生をどのように送るか、またどれほどのことをするかがまります。ベンジャミン・フランクリンはかつて「汝は人生を愛するか。人生を愛するなら、人生をつくる要素である時間をむだに過すなかれ」と言いました。

私たちが学ぶことのできる一番たいせつな教訓は、過去のことをくよくよせず明日のことを心配せずに、一日一日を最もよく生きることであります。実際に私たちは人生のうち一日だけを現にもっているものであって、それはすなわち今日であります。きのうはすでに過ぎてしまい、明日はくるかも知れない。しかし、今日は現にここにあるのであります。このたいせつな考えはエヴァン・ステイヴンスの「日の照る間に働かけ」(第四十三番)という有名な讃美歌によくあらわれています。

「日の照る間に働け、今日の義務をよく果たせ」

もちろん、ここにならうたっている意味は過去の経験からは何も学んではならない、明日の計画は立ててはならないということではあります。学ぶことも計画を立てることも私たちの知恵であります。

しかし、過去の経験から何ほどのことを学ぶか、また明日の計画をいかによく立てるか、すべて私たちが今日何をするかにかかっています。今日は、すなわちきのうの結果であり明日をひらく鍵であります。

アナ・ブラウン・リンゼイの言った「世の中における最もむこうみずの浪費家は時間をむだに使う人である。大ていの損失はまたもとにかえすこともできる、売りはらった家も土地もまた買いもとすことができよう。しかし、すでにすぎ去った瞬間、太陽のしずんにかきってしまった一年は、もうどんな力を以てしても、もとへかえすことはできない。私たちは神のために時間を使っているとき、時間を一番上手に使っている。たとえば義務の遂行、友人の獲得、奉仕の実行、小児の慰安、家事の整頓など、いづれを神がしたもうとも私たちの生命に必要である」と神がおぼしめすことに時間を使うことである。

神が私たちに一日一日立派に実行させようとおぼしめしているすべてのことを為すためには充分の時間が与えられている。しかしむ

だに過すためには一瞬の時間も与えられていない」ということばは賢いと言わねばなりません。

私たちの教会は、この世の生活における私たちの時間がたいせつであることについて、この「死ぬべき身をもった」生活中にたいせつであるばかりでなく、永遠の根本的要素として重要な役割をするることについて教えています。これは教会の教えている偉大な真理の一つであります。ソロウが「永遠を傷つけることなしに時間をつぶすことができるかのように」と言ったのを見ると、彼はすでにこの偉大な真理を少し知っていました。

モルモン経に出てくる偉大な予言者であるアミヌレクは、永遠の一部分であるこの世の時間を有効に使うことの重要性をはっきりと理解して「現世は人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、各々働らきを遂行せねばならぬ時期である……永遠の来世に行く準備ができるように私たちに与えられている」(アルマ書三十四〇三十二—三十三参照)と言いました。もしも私たちの一人一人が、毎日その時間を有効に使うと決心をするなら

ば、善いことをするためにほんとは大きな勢力が出されるにちがありません。私たちは、心配や不満足や利己主義や無用の後悔や有害な活動のために時間を失うべきではありません。人生はよい働らきと教養とのためにあり、またそのために生ずるまことの喜びと満足のためにあるのです。

時間を使え——働らくために。それは成功を得るために払うべきものである。

時間を使え——考えるために。それは力の源である。

時間を使え——読むために。それは知恵の基である。

時間を使え——親切であるために。それは幸福への道である。

時間を使え——礼拝をするために。それは生活の向上の大道である。

時間を使え——笑うために。こころの音楽である。

時間を使え——愛するためと愛されるために。あらゆる生活の目的である。

「仕事会」千九百六十三年一月第二回目の集りで)

考察その四「末日聖徒の家庭はよく組織されている」(四)

目的——決定をすることが上手な経営の中心であることを示す。

このレッスンの特色は一種の「社会劇」であります。そこではこの劇に出る人々が、ある問題に直面している人々の場へ自分を置いて、その問題があたかも自分のものであるかのように自由に感じ、行い、話す機会を与えられるように、一種の劇に仕組んであります。見る人の方には、人間というものがあるいろいろな状況のもとにどんなにちがった行動をするかを観察し、どのような言葉を出すかを耳にし、劇に出る人々のあらゆる感情に対して反応をすることができるといふ利益があります。無理がなく、自然に、まじめに行われるということがたいせつな点です。劇に出るのは、あるきまった状況のもとで自分たちがどんな反応をしめすかやってみようという人々で、この人々が自発的にするのです。演技や対話は「ぶつつけ本番」で行きます。暗記するところは一つもありません。演技者の一人一人は思った通りを言い、劇の中の人がある状況のもとで行うだろうと思つた通りを行います。背景も衣裳もなににもいりません。指導者が背景を説明しますと、劇

に出る人々は身ぶり手ぶりとは一致協力してよい決定をすることが出来ます。一しよに任んでいる親類の人々、またはその他の人々もたのまれたら何を選んできめたらよいかということに援助をするでしょう。「決定をするが上手な経営の中心」です。賢明に事をきめる場合には、ひじょうな熟練がなくてはなりません。

劇に上場される家庭の問題は、十代の娘であるスーザンがパーティーに必要なドレスを買ってデートに出かけるお金をもつべきかどうかについて決定をすることであり、父母と十八才になる息子と十五才になる娘と十二才なる息子になって対話をする各々の扶助協会の役がきまると、指導者はこの人々と数分間話をして、劇の問題へ入り方と解決について協定を行います。これがすむと指導者は、見ている人々へ背景の説明をします。それから各扶助協会員によって劇のはじまり討論の結果をきめるのです(時間のため、劇に出る人々を選ぶことと、クラスの指導者をするのは討論をするすぐ前にすることが出来るでしょう。劇に出る人々は全部扶助協会の姉妹たちでなくてはなりません)。

子供たちとは一致協力してよい決定をすることが出来ます。一しよに任んでいる親類の人々、またはその他の人々もたのまれたら何を選んできめたらよいかということに援助をするでしょう。「決定をするが上手な経営の中心」です。賢明に事をきめる場合には、ひじょうな熟練がなくてはなりません。

そのような心がなくてはなりません。そして後になると、一生の仕事に身をつけるために必要な訓練を受ける望みをもって、その目的を達する助けとなるでしょう。また、目にあふれたものはないで買いたいという衝動に駆られることなく、将来自分が一軒の家のあるじとなる時のことを見こすほどになるにちがいありません。

お金についてとおなじように、時間やエネルギーやその他のものを使う場合にも良い決定をしなくてはなりません。訓練期間中に、のぞましくない選択を選び出してのけることを行ふなら、良い決定を一そう容易にすることが出来ます。家族の人々が、将来を見こして明日のためになるような決定を今日行ふなら、一そう人間として成熟するようになりませう。

賢い決定をする訓練は、家族の一人一人が小さな事をきめる時に役に立ちます。そして大きな事を決定する時にだけ、家族の者が一致協力して考え賢い決定をすることは出来るのです。事をきめる時は気楽な環境が必要です。きめるべきことの調査の結果をテーブルのまわりにもち寄って、そこで賢明な決定を行うがよいでしょう。そこで、ああしようかこうしようか、または一時待とうかなどとおたがいの意見をたたくして最後に一番よい決定を選びます。または「家族の夕べ」などというきまつた時を利用して、これを行うことも出来ます。そのやり方はどうであっても、家族の一人一人はみな集って考えるために問題をもち出す機会がなくてはなりません。またその時は、もち出した問題についてわかつた事実を充分に心おきなくしらべるべきであります。またその時にはいろいろの選択についてその価値をはかってみなくてはなりません。が、また家族の人々の個人的感情もよく考慮しなくてはなりません。一方的に「よろしい」とか「だめ」とかきめてしまわなくてお互いに妥協をする方がよいでしょう。しかし、一たんきまつたら、家族の者はその決定を支持して実現させる責任があります。物事を決定するは頭脳のはたらきで、手足のはたらきではありません。決定は重要であると考えられる価値をもたずいて、また価値があると思えられた目的にもたずいて行われます。

と、信仰、勇氣、理解などの力が増し、とくに考えたり実行したりする能力が発達します。以上の性質が発達すれば、ただ頭の中にあるだけの知識を實際に役立つ知恵に生かして使うことができます。以上の性質はまた私たちの思っていることを事実にあらわすもので

討論のための考え

(一) 賢い決定をする訓練をまったく受けたことのない女の人が結婚したら、どんな失策をやりそうですか。

(二) 結婚したての男の人が絵の道楽をもっていました。彼は妻と相談をせずに、かなりのお金を絵をかく道具にかけています。ところが妻は、そのお金を家のことに使ってくれたらもっとよいだろうと考えています。この問題を解決するにはどうしたらよいでしょう。

(三) 上手な家政に欠くことのできないうものをもう一度ふりかえてみて、必要な性質と熟練とを発達させるに当ってあらわれた進歩を報告しなさい。

「社会科学」(千九百六十三年一月の第四回目の集りに)

神の律法と教会制度

「教会制度の基礎」

第三課 神の律法と人類の幸福

(つずき)

目的—教会制度にある組織と秩序の大切なことをはっきりさせる。

この前のレッスンで私たちは、神の律法は人類が自分のもっている才能を完全に発揮することができる、自分の造られた目的を実現し、また同時に生きる喜びを完全に受けることができるように導きを与えることに注目しました。神の律法とこれらの業蹟との組合せは、人類がその自由意志を使ってはじめてできあがるのであって、強制のかわりに自由の意志でえらぶことがそのたいせつな原則であります。マッケイ大管長は「神が自らの命を人類のためにお与えになったことは最大の賜であるが、その次に位するのは人類がその生活を自らの意志で支配する権利をお与えになったことである」と言

っておいになりませう。私たちはこのレッスンの中で、人類の幸福におよぼす神の計画にあらわれている制度と秩序について考えます。神は人間をとりあつかう場合にきびしい態度をおとり

になります。「そもそも創世の以前より天に於て定められた一つの交らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福にもとずく律法に従うによりて然るなり」(教義と聖約百三十二—二十一—)。

このように神は誤りのない真理をとりあつかっておいでになりました。このことは、宇宙の秩序や地球とその上にある生命とを支配している物理的法則の規則正しいことを見れば明らかであります。

「わが家は秩序の家なり」

「見よ、わが家は秩序の家にして混乱の家にあらずと主なる神言う。主また言う。わが名によりて為されざる捧物をわれいかで受くべきか。または、わが命せざりしものを汝らの手より受け入ることをせんや。主は言う。正にわれとわが父が創世の前より汝らに定めたる律法によらずして汝らに命ずることとを為さんや」(教義と聖約百三十二—八—十一)。

主の家にある秩序が私たちに一番はつきりあらわれている証拠は、物理的法則の働らきに見られるでしょう。ブリガム・ヤング大管長は「神の御子の神権は、この

世界をして現在あり、過去にあり、また未来にもあらしめる律法すなわち法則である」と言っておられます。この法則が働らいているときに、私たちは地球の自転によって太陽が出たりしずんだり規則正しく動くことが見えるのであります。地球もまたほかの遊星と一緒に太陽のまわりをまわり、同時にこの太陽系もほかの星と秩序正しい関係を保ちつつ一団となつて動いているのであります。

「私たちの世界に見られる秩序」

私達の住んでいる地球をもっとよくながめて見ますと、これと同じく一定不変の法則が働いて、それらに規則正しい秩序が明らかに見られるのであります。すなわち四季が正しく移りかわり、それと共いろいろな植物が成長しますが、また太陽熱と肥料と光線と湿度などの多少に従って、その成長のいどがきびうにちがうことがつきまします。植物の種子は自然の力と呼応して芽を出し、その種類に従って成長をします。これと同じ規則正しさが動物界にも見られます。この規則正しきは地球の創造以来きつづいて存在しており、神の律法通りにこれからも

秩序正しくつづくにちがひありません。

私たちのまわりにある物質の世界は、神の律法が働らくことによつてその目的を実現しておりまゝ。始めに神は「地は生物をその種類に従ひて出し、家畜と這うものと地の獣とをその種類に従ひて出すべし」と仰せになつて、その通りになりました(モーセの書二〇二十四)。物質の世界で法則が忠実に行われていることは、創造主である神に最高の知恵がある証拠であります。

「人間の生活に見られる秩序」

これと同じ偉大な知識と知恵によつて、人類はその創造された目的に完全に到達することができるよう指導と規制とを与えられています。しかし、人類は神から生れた靈の子供であつて、神と共に永遠である英知の持ち主でありまゝから、自由に選択をする特権が与えられています。救いの計画によると、人類は完全に進歩発展をするために指図と機会とを与えられてゐるが、真理の価値と、それと自分の進歩との結果起るところの「昇栄」との關係をひとりで見つけなくてはなりません。このことは靈感と啓示によつて示され

ています。

物質の世界は、その目的を達成するために、法則によつてきまつてしまつてゐます。しかし人類は自由の意志、すなわち選択の責任を与えられてゐるので、反省する能力と選択とをそなえて居り、その結果のよしあしは、人類が自分の創られた目的に完全に到達するかどうかを決定するのであります。

「人間關係を強調する」

人類の始祖であるアダムとイヴが禁断の実を食つて「死ぬべき身」となつたとき、彼らはまた善悪の影響を蒙る者にもなつたのであります。ルシフェルは悪の力を指揮する者でありましたが、イエス・キリストは人類の救ひ主、義の粹、人類にとつて光の真理の源であります。

アダムとイヴはエデンの園から追ひ出されましたが、主なる神はそれでも彼らと交通して、神聖な律法を教え、天の祝福をすべて彼らが受けることになるよう指示をお与えになりました。モーセの書第五章を読むと「アダムとイヴは神の御名を讀め、息子娘らにすべての事を知らしめたり」(モーセの書五〇十二)としてありま

す。しかし、サタンはアダムの子らをだまして「アダムとイヴの言を信するなかれ」と言ひましたから、彼らはアダムとイヴの言を信せずにはサタンを神よりも愛し、人はその時から肉體、肉欲、悪魔に従う者となり始めました(モーセの書五〇十三参照)。これらは肉の罪であつて、肉體の欲を満足させるところにあらわれれます。進歩の法則は肉欲にうちかち、分別を用いて欲望を支配することと直接に關係してゐます。これにより、義によつてはげましを受けるように身心を訓練することになります。

主なる神は聖靈により、アダムの子らにことごとく悔改めを呼びかけて、もしこの声に従つて悔ひ改めるなら必ず救われると仰せになりました。また「信ぜずして悔ひ改めざる者は皆救われず(進歩が止まる)と仰せになりました(ジョセフ・フィールディング・スミス著「救いの教義」第二卷二二七頁参照)」。而して、言、神の口より確なる神の命となり出でたるを以て、これらのご充たされざるべからず」(モーセの書)しかし、カインは神にそむいて、神の律法に従わず「わが知るべき

主とは何人なりや」(モーセの書五〇十六)と言ひました。主なる神に捧げ物をする時にさえ、悪魔の言うことを聞きませんでした。それでありますから神はカインの捧げ物をお受けになりませんでした。カインは警告を受けたのに主の言葉に従はず、サタンと秘密の契約を結びました。カインは自分の悪事を誇り、自由意志を使つて弟のアベルを殺しました。この悪事はとつきの出来事ではなくて、利己主義、ねたみ、肉欲などがかさなつた結果こうなつたのであります。カインの背教が最高潮に達してついにアベルを殺すに至りました。カインに従つたアダムの子らはたくさんあります。

ここにおいて、私たちは対人關係、とくに各人の權利を尊重することが「生命と救ひの計画」の中でひじょうにたいせつな部分であることがわかります。もし私たちが神を愛するならば、私たちは神の誠命を守るにちがひありません。第一のまた最も大きな誠命は神を愛することであり、第二の誠命は隣り人を愛することであり、第三の誠命は隣り人を愛することであり、太初から今に至るまで神と人との交わりがずっとつづいていますが、いつ

の世にあつても人間の行いと、人と人の關係がたいせつであることが強く教えてあります。

「イスラエルの例」

アダムからノア、下つてモーセに至るまでにあらわれた予言者たちが人々に訴へたことばは、互いに愛し、利己主義と貪欲とにうちかち、隣り人の幸福を心がけよといふことであります。

モーセがイスラエルの子らをエジプトからつれ出したとき、モーセは最大の束縛が惡の束縛であることを知りました。イスラエルの子が荒野へ着いてから、彼らは主によつて先祖の地へつれ戻されるにたるほど彼らの行いを変えるため、四十年にわたるたえまない訓練を必要としました。出エジプト記は、イスラエルの子に人間の行いにあらわれた義の根本原則を教えるため、モーセを通して主がお努めになったことをあざやかにしるしています。

前に述べた教えの総括である十誡は、神を愛し隣り人を愛することを強く主張しています。十誡の中の始めの四つは、私たちの日常生活において神を尊び神を礼拝しなくてはならないことに注意が集中してあります。第五の誡命は家

族關係がたいせつであることを強調しています。そして、両親と子供たちが互いに責任を感じて愛し尊敬するときにはその結果が与えられることを明らかにしています。

次の五つの誡命は、社会の中で各人は、各々の欲望を正しい方向にむけて抑制しなくてはならないことを教えています。汝殺すべからず、姦淫すべからず、盜むべからず、偽証すべからず、貪るべからず、以上はサタンが人の心を支配するとき、人間關係から發生する個人の問題であります（出エジプト記第二十章参照のこと）。

イエスがこの世に来りたもうたとき、山上の垂訓において人間關係のたいせつなことを拡張してお教えになりました（マタイ伝第五章参照）。このとき、イエスはすべてのお教えを理想的な社会的の相互作用の見地から総括しておいでになります。まづ、イエス・キリストの福音すなわち「生命と救いの計画」は、理想の生き方をとする設計図であります。そのものになつてゐるのは愛であつて、人間の完全な結び合いが達成される唯一つの計画であります。

「神聖な律法と組織」

(一) 制度と律法の説明。

アダムの子孫は世界中にひろがつてふえました。その途中、アダムの子孫は自由意志による選りより、またいろいろなてよの靈感と啓示と神のみこころによる指示によつて分裂しました。人間は

英知と反省の力を授けられていましたから、他人に対する自分の活動を規制しなくてはならないといふことも認めていました。そして、もう一つも原始的な社会でもあつた形が存在していました。管理とは、あるものの行動を規制する場合に権能を行うことにすぎません。組織された社会では、この規則は法律によつて確立されて居り、法律とはそれが適用される人々の同意によつて主張される規則もしくは行爲の様式のことであるにすぎません。法律を破るときは取締り当局によつて罰を受けます。

歴史を見ると、いろいろな時代にこの取締り当局が圧制的な権力となり、一人もしくは数人のグループによつて専用され、これらの者が軍隊の力で強力な帝国をつくりあげたことがあります。力はサタンの根拠地であります。多くの国家が力をもたして興るときまづて腐敗の末没落し、これよりも

強い力が集中してあらわれた別のところへ権力が移つてゆきます。このような形の制度は、人類の幸福をもたしてできてゐるものではないありません。

「永続する制度」

イエス・キリストの教会の回復は、この地球上に「神の王国」をたてることであります。「教会」と「王国」とはこの場合同じ意味であります。教会とは、建物であり、か禮拜の場所であるかと考へてゐる人があります。しかし、広い意味の教会は、建物組織計画会員などをすべて含んでいます。

私たちが現在使つてゐる教会という言葉には、これらがみな含まれてゐるばかりでなく、この説明に言つてないはるかに根本的な要素が含まれてあります。この要素といふのは「神の権能」であります。イエス・キリストの教会すなわち「神の王国」は、神聖な律法によつてたてられ、愛という神の性質がそのもとになつて運営されてゐます。この「神の王国」は政治的性質をもつてない完全な「神権政治」であつて、その目的とするところは「人に不死不滅と永遠の生命とをもたす」ことであります。そしてその途上、進歩向上と

達成により、人にこの世の生活において喜びを与えることであります。

「神の王国の特性」

私たちはどのようにして「神の王国」をほかのものに見わけることができませうか。「神の王国」がほかのものとちがっている特性は何でありますか。第一に「神の王国」とはイエス・キリストが王としてまた神として来りたもう場所であって、永久につづく王国であるのであります。

義の律法がこの王国の法典であって、人にくしみ獣にくしみ、実に一切生きている者のにくしみがなくするところでありませう（教義と聖約百一〇二十六参照）。この王国の中では悪が征服されてマタイ伝六〇九一三三にしてある祈りの模範である「御国がきますように、みこころが天に行われる」とおり、地にも行われますように」といふねがいが実現します。

「神の王国の実例」

私たちは、モルモン経ニーフアイ第四書を復習するとき「神の王国」がどのようなものであるかをちょっと見ることであります。このところには、福音の諸原則、救い主の教えに従ってニーフア

イ人もレーマン人も生活をしたことがしるしてあります。神の律法に従って生活をした結果彼らは社会悪にうちかち、彼の勢力をその社会の進歩向上にむけることができました（ニーフアイ第四書二一三、五十二一十七参照）。

このような状態が二百年つづいた末、彼らは自分のところから高慢と富とのために神の教えにそむくようになりました。彼らは利己主義と貪りのためにその心がぐらぐらになり、救い主が先祖にお教えになった良い生き方の価値がわからなくなりました。

「神聖な相続財産」

前の二つのレッスンが述べたことと参考書とから、私たちは次の二つに気がつきませう。(一)は神の律法は人類の利益と幸福のために計画されたこと、(二)は制度と秩序が「神の王国」の発展にとつてなくてはならないものである、ということになります。

また、永遠の父なる神はその子らである人類の進歩向上を心にかけておられたもうことを明らかにしました。この目的のために、父なる神は、人類に与えられた啓示と靈感を通してあらわれている天の知恵によって、人類のために「生

命と救いの計画」をおたてになりました。創造主はこのようにして人類の生活に正しい指示をお与えになり、人類がもっている力をことごとくあらわして用いることができるようになさいました。

そこで、私たちのもっている「神聖な相続財産」は永遠の父なる神の関心と知恵と愛とであって、これらのものは私たちが隣り人と価値ある生活をするためのも、またキリストの贖いによって可能となった「日の栄の最高に昇る」ための道をあきらかにしている神の律法の中にはっきりと見えております。

考察のための考え

(一)地球を創造することの大きな目的は何でありませうか。
(二)管理が立派に行われるために、律法に服従することがいかにたいせつですか。
(三)人類の創造された目的を完全に遂行するために、選択というところがどれほど大きな意義をもっていますか。

(四)隣人に対するとりあつかいは、どのていどその人が神を愛しているかをあらわしますか。
(五)十誡の中には社会に関係して言

つてあるところがありますが、

それはどんなところですか。山上の垂訓はどうですか。山

GOSPEL IN ENGLISH (Eigo no Fukuin)

- (1) It was in the land of Goshen in Egypt that Jacob sat thinking.
- (2) He was thinking of God, our Heavenly Father, and of the many, many blessing that had come to him.
- (3) His heart was happy and he was very grateful. He was now in a land of plenty and all his family were with him.
- (4) They had come there upon invitation of the Pharaoh of Egypt and of Jacob's son Joseph, who ruled directly under the Pharaoh.
- (5) As Jacob sat thinking, he remembered his Father, Isaac, and his lovely mother, Rebekah.
- (6) He was grateful that they had taught him to worship God, our Heavenly Father.
- (7) He remembered his twin brother, Esau, who now had a large family of his own.
- (8) One thing that Jacob thought about often was his trip to the land of Haran where his mother once had lived.
- (9) He had gone there to visit his Uncle Laban. It was while there that he had met Rachel, who was later to become his wife.
- (10) As he had left home, he walked northward, traveling in the day and resting at night.
- (11) Each evening, after finishing his supper, he would say his prayers and then select a place to sleep.
- (12) One night, he remembered, his bed was the hard ground and a large stone was his pillow.
- (13) But in spite of discomfort, this became one of the most blessed nights in all of Jacob's life.
- (14) It was during this night that the Lord gave him a glorious dream.
- (15) In the dream, Jacob saw a ladder reaching from heaven to earth.

- (16) On the ladder he saw angels who were going up to heaven and coming down.
- (17) As Jacob looked up to the ladder, to his great delight he saw God. The Lord then spoke to Jacob.
- (18) He told him that He was the God of his fathers, Abraham and Isaac, and that He was going to give him all the land in that place.
- (19) He told Jacob also, that He would bless him with many children.
- (20) In addition, the Lord promised Jacob that He would be with him wherever he went and that He would bring him again to that land.
- (21) When Jacob awoke he felt so happy that he shed tears of joy.
- (22) Kneeling upon the ground, he prayed with all his heart and soul unto God.
- (23) He thanked Him for the glorious dream and for precious promises that He had made to him.
- (24) Then Jacob took the stone that he had used for a pillow and made an altar of it.
- (25) He poured oil upon the stone, and there he made a covenant with the Lord, saying, "... of all that thou shalt give me I will surely give the tenth unto thee." (Genesis 28:22)
- (26) This is the law of tithing that all faithful Latterday Saints observe today.
- (27) After Jacob had made this covenant with God, he journeyed on to the land where his uncle Laban lived.
- (28) As he neared the city, Jacob saw a well in a field. By it were several flocks of sheep. The shepherd had brought their animals here to water them.
- (29) As Jacob talked with the men, a lovely young woman approached with her sheep. The shepherds told Jacob that her name was Rachel and that she was the daughter of Laban.

- (30) Jacob was delighted. He hurried to help his cousin. As he pulled back the large stone that covered the well so that he might water the sheep for Rachel, he told her who he was.
- (31) Then he kissed her. Rachel was happy, too. She ran quickly to tell her father the wonderful news about Jacob and his arrival in Haran.
- (32) Laban invited Jacob to stay with them and to assist him with his flocks of sheep and herds of cattle. This Jacob was glad to do.
- (33) After seven years, Laban gave him for his service his daughter Leah, and after seven more years, Rachel, to be his wives.
- (34) He also served several more years, receiving cattle and sheep for his pay.
- (35) Throughout the years that Jacob worked for Laban, the Lord blessed him abundantly.
- (36) He came to have many cattle, sheep, camels, and servants.
- (37) God also blessed him with many children, but most of all he loved Joseph, his son who now ruled Egypt.
- (38) He was Rachel's son, too, and that in itself made him very special,
- (39) As Jacob sat thinking, he remembered the day that his other sons had returned from the desert, bringing Joseph's coat with them.
- (40) They had let him think Joseph had been devoured by a wild animal.
- (41) Oh, how grief-stricken and horrible he felt! How he wished that he had never sent Joseph on that errand.
- (42) Then Jacob remembered that the story was not true.
- (43) He remembered clearly the day that his eleven other sons had returned to Canaan from Egypt, bringing with them gifts of mules laden with the good things of Egypt, such as corn, bread, and meat.

- (44) They were gifts from his son, Joseph, now ruler over all Egypt, and the Pharaoh, under whom he served.
- (45) He remembered with the deepest gratitude ever the message of Joseph, which was "...Thus saith thy son Joseph, God hath made me lord of all Egypt: Come down unto me,..." (Genesis 45:9)
- (46) He rememberd, too, his answer: "...It is enough; Joseph my son is yet alive: I will go and see him before I die." (Geneses 45:28)
- (47) Now here he was in the land of Egypt, with Joseph and his family.
- (48) All the others of his family were there, too. The Pharaoh had been very kind to all of them.
- (49) He had given them rich pastures for their flocks and many rich fields for their grain.

編集後記

そろそろ、東京特有の木枯しが吹きまくる季節になって、いつもあわて出すのが執筆者たち、十二月号と来年の一月号の編集を一時に始めるせいで、いつもの二倍三倍ぐらい忙しい時です。ここで毎月忙しいなか、原稿を提供してくださる執筆者を紹介したいと思います。

▲編集委員長、佐藤龍猪兄弟、教会の代表役員として、また地方部評議委員や墓地委員長など大変に忙しい日を送っていられるなかで「予言者のことば」「伝道部長メッセージ」「部長夫人メッセージ」「アロン神権プランチテイーチングレッスン」「その他「質疑応答」「教会歴史粹」「信仰講話」「扶助協会レッスン」の翻訳をはじめ「聖書研究」「モルモンの教義」などと非常に時間のかかる原稿を書くかたわら、最近「求道者への手紙」や「会員のみなさまへ」などの初歩の人たちへのための読みものに力をいれておられる。「気持の若さでは誰にも負けない」とおっしゃっている。

▲佐藤泰生兄弟、彼が毎月受け持っているのが中央支部で開られて「聖研」の記事。音楽、絵画、アマチュア無線となんでもやりこなす大変に器用な人。伝道部のアロン神権指導者として活躍されている。彼の口ぐせは「あゝ、なるほど」とうなずくこと。

▲上野道夫兄弟。毎月色々な資料を提供してくる「日曜学校ガイド」の執筆者、原稿をべ切日にまに合せる名人(?)でもある。伝道部日曜学校指導者。

▲鈴木百合子姉妹は「子供の日曜学校ガイド」の執筆者。「ゆりさん」の愛称でよんだ方がびつたりするような人、持前のセンスのよさが毎月のガイドを楽しく読まさせてくれます。伝道部子供の日曜学校指導者。

▲MIAリーダーは佐藤襄二兄弟と栄子姉妹の御夫妻の共同執筆。かわいい二世も誕生しこれからますますはり切られることだろう。伝道部MIA指導者。

▲「山ちゃん」こと山岸姉妹、「練習の讃美歌」を南城姉妹から受けつがれて毎月書かれます。東京L・D・Sコーラスの指揮者でもあり、原稿を読んでも、あの優しい人がらにじみでてくるようなお姉さま。

▲今月号で二回目だけ「ちよっとひととき」の執筆者に坂井、坂本両兄弟、坂井桂兄弟は長老定員会の責任もあり大変忙しいそう。

▲系図のガイドが今月からのせられます。元横浜支部、現在勤労奉仕宣教師として活躍されている小泉兄弟の受持ち。編集委員会には遠い横浜から必ず出席されたフアイトの持主

▲毎月扉の美しい写真を提供したり、その他写真を一手に引き受けているのが中央支部の上村陽子姉妹、高校二年のお嬢さんカメラマ

ン。九月号の扉の写真は名古屋支部の住友妙子姉妹撮影によるもの。

▲そのほかに、毎月支部だよりをお出しくださる各支部の記者たちのことも忘れてはならないこと。毎月の投稿を感謝しております。

▲今月号、特集記事をのせたため「支部だより」「信仰講話」「質疑応答」「会員のみなさまへ」「ある求道者への手紙」「教会歴史粹」は休載させていただきます。

▲とにかく、今年もこれで楽しいクリスマスを迎えることができそうですが、どうか記事の投稿をお忘れなく。

▲今年もこれで編集後記の書きおさめ。いろいろと御指導の手紙をいただきましたこと感謝しております。来年もどうぞよろしく。

(小林)

月刊「聖徒の道」第六巻第十二号

一九六二年十二月一日発行

実価 一カ年 九一四円千共

半カ年 四五六円千共

一部 七十円

編集兼
発行人

ダウエン・N・アンダーセン

発行所

東京都港区麻布広尾町十四

末日聖徒イエス・キリスト教会

北部極東伝道部

図 書 案 内

教義と聖約 高価なる真珠 モルモン経	上質革製合本	1100円
教義と聖約 高価なる真珠 モルモン経	合本	300円
モルモン経	(新訳)	200円
信仰箇条の研究		330円
モルモンとは？	(新版)	150円
完成への道		200円
初等協会教科書		150円
総合聖句の手引		150円
日本系図探究要覧		100円
アロン神権者用学科課程		150円
メルケゼデク神権、教師と生徒用 「モルモン経の読み方の手引」		200円
ナザレのイエス		100円
正しい日本史		100円
家督権の祝福		100円
扶助協会手引		50円
求道者教育法		120円

日曜学校用

宗教と生活Ⅱ	150円
回復された神の教会	100円
福音の実践	150円
聖典中の指導者	150円
我等の標準聖典	200円
古代の使徒	150円
福音の紹介	200円
シオン山の救い手たち	200円
教義と聖約の教え	200円

M I A 用

生活の目標	150円
モルモン経研究ガイド	100円
MIA・エンサイン・ローレルの手引	150円
演説が上手になる法	150円

讚美歌及び歌集

末日聖徒讚美歌 (新版)	400円
子等は歌う	100円
レクリエーション歌集	400円

……………注文は各支部長へ……………

支 部 所 在 地

北海道地方部

旭川

旭川市八条五丁目
MIA集会場 旭川公会堂

室蘭

室蘭市幸町八九
電話(七〇五四)

小樽

小樽市富岡町一ノ三五
電話(二一八二二四)

札幌

札幌市北三条西二四丁目

東中央地方部

群馬

高崎市並榎町二七五
群山市山田町六三

甲府

松本市同心町六一二

新潟

新潟市中大畑町五五七 金井方
電話(二一八六六〇)

仙台

仙台市光禪寺通り二八
電話(五一〇八九七)

東京中央

東京都渋谷区八幡通一ノ三四
電話(四〇八一三三〇七)

東京北

東京都豊島区高田本町二ノ一四八七
集会場 日曜学校 武蔵野ドレマ
MIA 徳川生物研究所

東京東支部

東京都江戸川区小岩町四一七五〇

東京南

東京都大田区南千束町二四九
電話(七八二一六二三七)

東京西

東京都港区青山北町六ノ三四
電話(四〇二四〇一〇)

山形

山形市八日市八五〇

西中央地方部

横滨市港北区篠原町二九
電話(四九一八七七二)

福野

大阪市阿倍野区飯南町中一ノ三八
福岡市東薬院二ノ四〇

福島

福島市古田町古江四〇ノ三
電話(三三六一二五)

金沢

金沢市成瀬町二ノ四 野田方
集会場 農業センター

京都

京都市左京区松ヶ崎桜木町一四
名古屋市福和区北山町三ノ四一
電話(七三十四二二〇)

名古屋

兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四
電話(五一〇一四一)

西ノ宮

大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山市浜字下六ノ坪五五三ノ四
神戸市灘区篠原本町四ノ三五
電話(八六一二六〇七)

岡山

山口県柳井市今市三九一

三ノ宮

山口県柳井市今市三九一

柳井

山口県柳井市今市三九一

沖繩地方部

沖繩宜野湾村野嵩区三二八
沖繩那覇市松尾区一三九